

平成 29 年度 修士論文

写真・アルバムが持つ子育てへの影響について

～乳幼児を持つ保護者と大学生の自己形成への影響の点より～

指導教官
小崎 恭弘

大阪教育大学大学院 教育学研究科
家政教育専攻 生活文化・生活科学コース
岩 田 文 弥

序章

【1】現代の子育て環境

(1)現代の子育てを取り巻く社会状況

子育てとは、子どもとそれを取り巻く環境によって変化していくものである。そしてその状況は時代によって絶えず変化している。子どもに関係した変化としては、少子化社会の進行・待機児童数の増加・児童虐待の件数増加といった問題が現代では注目されている。

①少子化問題

我が国の年間出生率は、戦後の第1次ベビーブーム(1949年)、その後の高度経済成長期に起こった第2次ベビーブーム(1973年)の時点から一転し、低下の一途をたどっている。具体的には、戦後最高の年間出生数となっていたのが第1次ベビーブームの約270万人であり、第2次ベビーブームの時点では約200万人である。それが1984年には150万人を割り込み、2016年時点では約98万人と100万人を下回る過去最低数となっている。⁽¹⁾合計特殊出生率として最低値は、2005年の1.26である。この数値は第1次ベビーブーム時点では4.3であり、出生数の数値推移と同様、減少傾向にあり2016年時点では1.42となっている。⁽²⁾我が国の今後の人口は2010年の1億2,806万人から2060年には8,674万人になることが見込まれている。⁽³⁾

少子化によって発生する問題として、いくつかの点が考えられる。

山口(2005)は少子化によって起こる社会経済問題を以下のように述べている。⁽⁴⁾

- 1:労働力人口比率が下がることにより労働人口負担が増す。
- 2:年金の納付者と受給者の比が低下することにより納付者の年金支払い負担が増し、また年金負担率世代間格差を生み出す。
- 3:国内消費が次第に先送りになり、主として国内消費に依存する生産業者や教育産業や他のサービス産業に打撃を与える。
- 4:組織の階層構造はピラミッド型(上位の地位が相対的に少ない)なのに人口が逆ピラミッド型になることにより、年齢に依存しない能力実力主義によって機会を与えない限り、若者が相対的に社会的に高い地位や影響力を持つ地位を得る可能性が大きく減少し若い世代の社会的上昇意欲を損なわせる。
- 5:逆ピラミッド型の人口分布は、高齢の介護必要者の数に比べて介護できる人たちの人口の割合を減少させ、高齢者の介護問題を深刻化させる。
- 6:技術革新や学問、芸術、スポーツ国際競技などは比較的少数の秀でた人達によって推進されてきた部分が多いが、人口の絶対数の減少は秀でた才能を持つ人達の出現の可能性を減少させ、これらの活動を低迷化させる。一方少子化に伴う人口減少は、食糧問題や資源・エネルギー問題上は有利と考えられるが、現在の過激なレベルの少子化はそのコストがベネフィットを大きく上回ると考えられる。

上記の問題について、日本においては特に注目されている点の1つが「年金負担率世代間格差」である。これは、年金を受給するようになる高齢者世代の人口が今後さらに増加して

いく一方で、少子化によって年金の納付を行っていく世代の人口が減少することで、納付者の支払い負担が増加するということが、かつ納付者が減ることによって、世代間で納付金額に差が生まれるという問題を指している。

これらの他に、労働力の低下についても深刻な問題であるとされている。国内の出生数の低下によって、現在よりも国内の労働者数が低下し、税金などの負担の増加や国外との競争力が低下するのではないかと考えられている。労働者世帯への負担が増加することで、現行の社会保障制度が機能しなくなってしまい、子育て世帯や高齢者世帯を対象とする社会保障が不十分になってしまうといえる。

これらは現状すでに発生している問題であり、かつ将来に向けても解決すべきとされている。社会保障の整備などがこれまでに比べてより必要とされている現代においては、その充実を阻害する要因になる少子化は早急に解決すべき問題である。

②待機児童問題

子どもの出生数・出生率が共に減少している一方で、保育所に入所することの出来ない待機児童の問題が顕著になっている。厚生労働省の発表(2015)では、4月時点で全体としては23,167人となり、前年と比較し若干の増加が見られる。⁽⁵⁾

待機児童による問題としては、働くという意味を思った親が子どもを保育施設に預けることができない結果、働きに行くことができないという点である。育児情報を得るために活用されるSNS¹上でも、同様の内容について注目されたこともあり、市民からの署名活動などを経て、待機児童をめぐる保育施設の不足は政治問題として扱われることとなった。

待機児童の旧来の定義は「認可保育園に入所申請したものの受け入れられなかった人数」だったことに対して、2001年改定の新定義では「保育所入所申込書が市区町村に提出され、かつ入所要件に該当しているが、現に保育サービスを利用していない児童である。ただし、特定の希望する園を待機する児童、保育ママや地方公共団体における単独保育施策において保育されている児童は含まない」となった。定義の変更によって、待機児童の数は減少したものの、都市部などでは現在も待機児童数は増加している。地方と都市部では、待機児童の傾向に差はあるものの、国全体のレベルで見ても早期解決が望まれる事象の1つである。

③児童虐待問題

子どもを取り巻く問題のもう1つ無視できない事象として、児童虐待という点が挙げられる。2016年度の児童相談所での対応件数は、10万件を超えて過去最高件数となった。⁽⁶⁾この数は2010年度時の対応件数から増加し、件数としては倍増している。件数増加の要因は、心理的虐待が増加したこと、児童が同居する家族へのDV²(面前DV)についての警察からの通達が増加したこと、児童虐待通報ダイヤルやマスコミによる児童虐待に関する報道させるよ

1 ソーシャル・ネットワーク・サービスの略、以下SNSと表記する。

2 ドメスティック・ヴァイオレンスの略、以下DVと表記する。

うになり国民に意識が浸透し通報件数が増えた,以上の点が挙げられる。

2016 年度の児童虐待件数の内訳としては,心理的虐待の割合が 27.7%,ネグレクトが 23.7%,性的虐待が 1.5%,心理的虐待が 47.2%となっている。(図 1 参照)通報件数については,警察からの通報が件数割合としては最も多く,次いで近隣知人からの件数が多くなっている。全体としても通報件数自体が増加しており,これは先ほどの述べた国民意識の向上が要因になっていると考えられる。

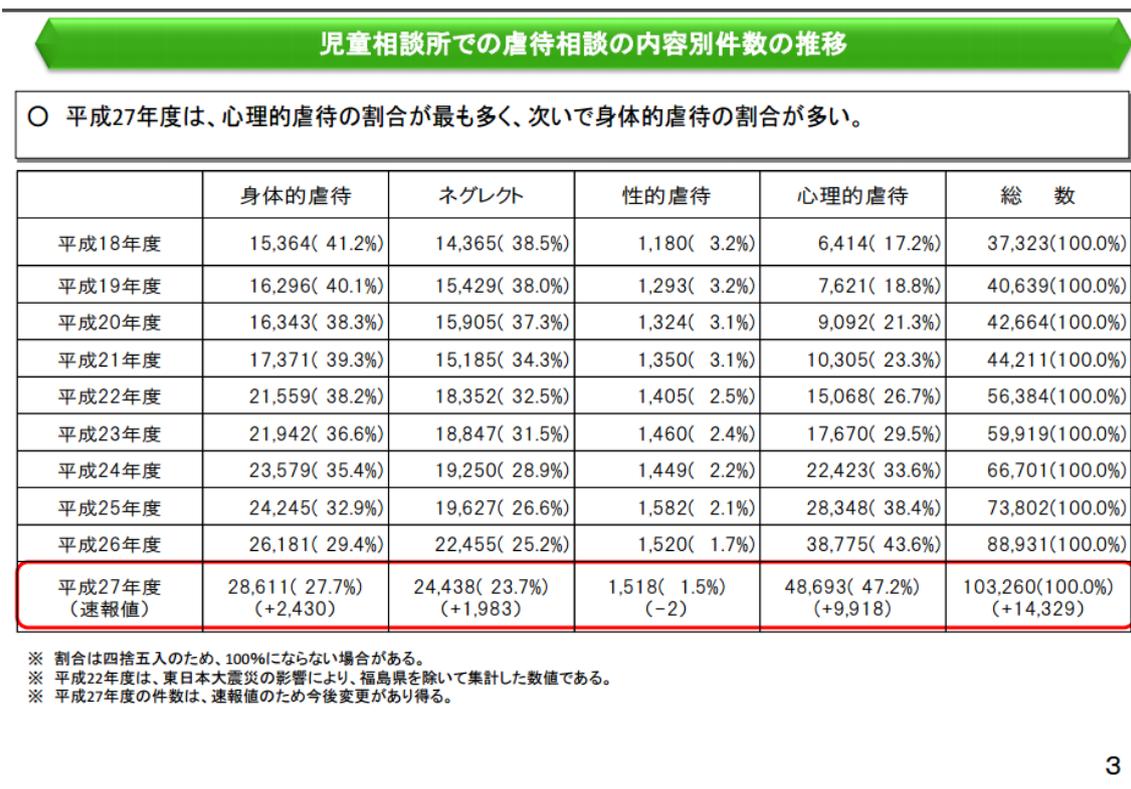


図 1 児童相談所での虐待相談の内容別件数の推移 平成 27 年度 厚生労働省発表⁽⁷⁾

児童虐待という事象の増加原因について、育児へのストレスや不安感の表れとして、虐待を行ってしまうケースがある。虐待の発生原因は、保護者のみにあるのではなく周囲環境にあるとも言える。だからこそ、子育て環境の改善や子育て世帯を対象とした支援の強化は必要であるといえる。

(2)保護者を取り巻く社会状況

子育て環境並びに今後子育てに関わる保護者を取り巻く社会の変化・問題として、以下に記述する「男女共同参画社会の実情」「共働き家庭の増加」「ひとり親家庭の増加」といった点が注目されている。

①男女共同参画社会の実情

1999年に男女共同参画社会基本法が成立した。これまで一般的な認識であった「男性は外で働き、女性が家庭を守る」という固定的性別役割分業を基本とする考え方では、現代の社会・生活を維持することが困難になっている。男女共同参画社会とは、「男女が、社会の対等な構成員として、自らの意思によって社会のあらゆる分野における活動に参画する機会が確保され、もって男女が均等に政治的、経済的、社会的及び文化的利益を享受することができ、かつ、共に責任を担うべき社会」とされている。(男女共同参画社会基本法第2条より)⁽⁸⁾

高度経済成長期に生まれた固定的性別役割分業についての考え方は、現代においては改めべきとされている。男性と女性の双方に調査を行った結果としても、固定的性別役割分業に対する意識は男女ともに、反対意見が増加の傾向にある。⁽⁹⁾

固定的性別役割分業についての疑問を多くの人が抱えるようになった一方で、女性の就業形態については、いまだに課題が残っているとされている。欧米などの諸国と比較した場合議論されるのが、「M字型就労」である。⁽¹⁰⁾これは、女性の年齢階級ごとの就業率の結果を表したものである。20代中盤移行から女性の就業率が上昇しており、その後30代に就業率が低下するといった状態になっている。また40代中盤移行で再び就業率が上昇している。諸外国と比較した場合、欧米諸国ではこのような年齢階級ごとの就業率の変動の傾向は、ほとんど見られない。このことから、女性の就業が生涯を通じたものではなく、子育て期を挟んだ一時的活動になってしまっている。固定的性別役割分業に疑問を持つ人が増加している一方で、女性の就業が生涯を通じたものではなく、その意思を優先することができなくなってしまっているのではないだろうか。

②共働き家庭の増加

共働き家庭とは夫婦がお互いに正規・非正規に関わらず、就業状態にある世帯を指す言葉であり、1980年以降その世帯数は年々増加している(図2参照)。⁽¹¹⁾共働き家庭増加の要因としては、前述のように女性の社会進出が一般的になったこと、また就労形態として正規雇用ではない非正規雇用の割合が男女共に増加し、家庭の収入が低下している。結果として家計を支えるために夫婦が共に働くことが必要になっている。先に述べた男女共同参画社会の

持つ特性の一端として、現状では男女が平等に社会に進出するのではなく、1つの世帯において男女が共に働くことが必要になっている。

男女の就労の形態には未だに差があるものの、共働き家庭が増加したことによって、男女が共同で家庭経営に当たる必要が生まれている。このことは、家庭経営のあり方と夫婦(男女)の役割分担の考え方に変化を与えるきっかけとなっている。

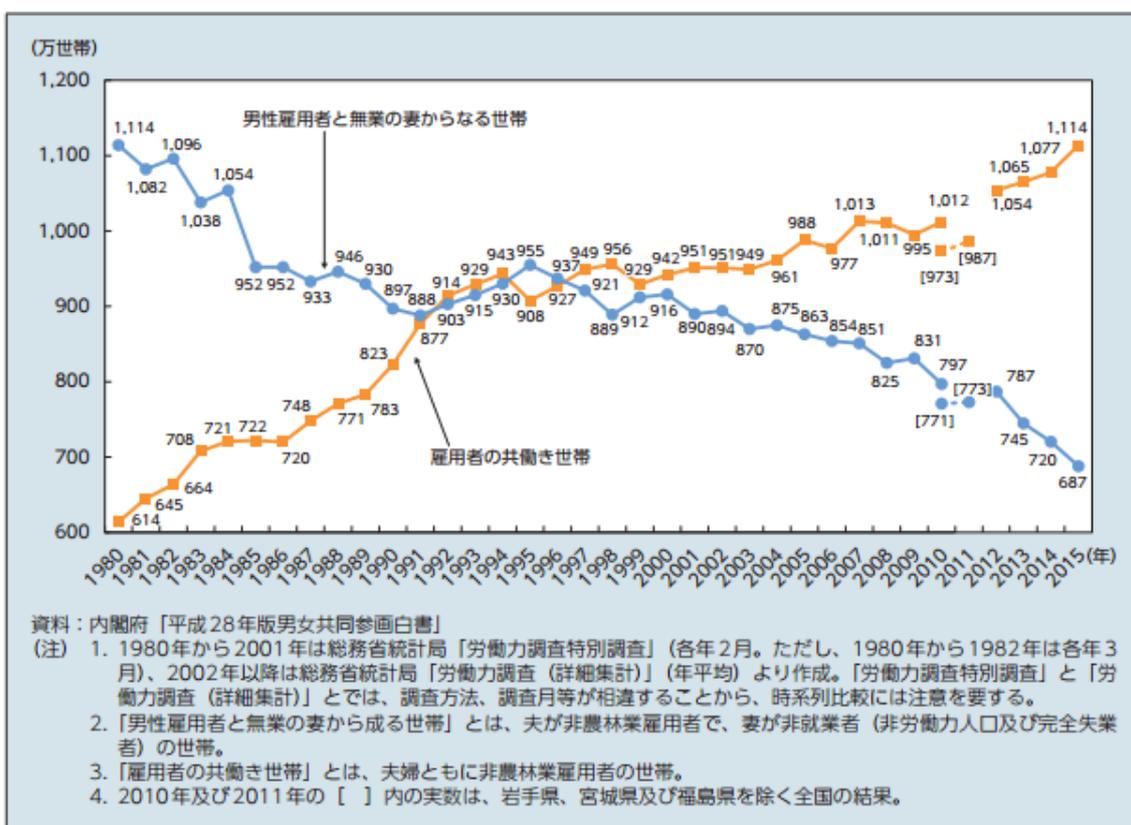


図2 共働き等世帯数の推移 内閣府平成28年版男女共同参画白書より⁽¹²⁾

③ひとり親家庭の増加

子育てを行う世帯は、夫婦がそろっている家庭だけではなく母子・父子世帯であることもあり、またその世帯数は年々増加している。5年に1度厚生労働省によって行われる「母子世帯等調査」では具体的な世帯数として、2011年時点で146万世帯、内訳として母子世帯が123.8万世帯、父子世帯が22.3万世帯である。⁽¹³⁾この数値は、1988年の調査時と比較して母子世帯は1.5倍、父子世帯は1.3倍になっている。ひとり親世帯の増加要因として、死別による単親化の割合は低下しており、男女共に離婚もしくは未婚といった要因が増加している。

ひとり親家庭では、就業状態に男女で大きく差がある。父子家庭では、正規雇用が87.1%であるのに対して、母子家庭では43.0%となっており、年間平均収入も大きく差がある。具体的な数値として2011年の全国母子世帯調査によると、児童のいる世帯の1世帯辺りの平均年間手取金額が673万円であるのに対して、母子世帯では223万円、父子世帯では380万円

である。結果として母子家庭の相対貧困率は、2012年時点で54.6%となっている。進学率については、高校等までにはひとり親家庭と全世界に大きな差はないが、大学進学率になるとその差は大きく、全体の割合が53.7%であるのに対して、ひとり親家庭では23.9%である。最終学歴が高校卒業までとなることで、将来的に正規職業につくことが不利になり、その後の貧困の連鎖にもつながっていくと考えられる。

子育てを行う世帯は多様化しており、これまで母子家庭のみを対象とした支援政策が行われていたが、今後は父子家庭を対象とした支援も充実させていく必要があるといえる。その第1歩として行われたのが、児童扶養手当の父子家庭への給付である。しかし、まだまだ十分な支援が行われているとはいえず、今後さらに母子・父子双方のひとり親家庭へ支援制度を充実させていく必要があるといえる。

④子育て支援の必要性について

これらの3つの点「男女共同参画社会の実情」「共働き家庭の増加」「ひとり親家庭の増加」より、現代の子育て環境は保護者にとって非常に困難なものになっているといえる。子育てを行うことの困難さが顕著になり、社会的にも注目されるようになってきた。そこで必要とされるのが、子育て支援制度である。

子育て支援とは、子どもを持つ家庭が子育てに取り組みやすい環境を作る目的で実施されている。男女の就労と子育ての両立、共働き家庭の増加と男女の役割分業、1人親家庭の増加等の家庭環境や子育て環境の変化に伴い、子育てに困難さを感じる家庭を含め、子育てを行う全ての家庭に対して支援を行うことである。

子育て支援の始まりは、現在行われているものとは目的が異なっているが、様々な改訂を繰り返しながら、前述のような様々な家庭環境への支援を目的とした子育て支援制度が生まれている。以降ではその具体的内容と変遷について記述する。

(3)子育て支援制度について

①子育て支援制度の変遷

現代では様々な子育て支援制度が実施され、より良い子育てが行われるように行政・民間ともに取り込まれるようになってきている。子育て支援制度の始まりは、1994年に「今後の子育て支援のための施策の基本的方向について(エンゼル・プラン)」が策定され、少子化対策への施策として地域子育て支援センターの整備などが行われた。その後1999年には「重点的に推進すべき総合的な少子化対策の具体的計画(新エンゼルプラン)」が策定されて、子育てサービスの充実並びに女性の仕事と子育ての両立を支援する動きが、国の世策として定着した。しかし、この時点での支援目的はあくまでも少子化対策であり、包括的な子育てへの支援制度とはまだ考えられていなかった。2002年に策定された「少子化対策プラスワン」では、少子化対策支援に加えて、次世代の保護者を育成するという目標も加えられた。これによって、子育てを行う家庭を支援するためだけでなく、地域や社会が子育て支援を行う環境を作

ることも、制度の目的に含まれるようになった。

2004年には、「子ども・子育て応援プラン」が策定されて、今後10年間で展望した目指すべき社会の姿を掲げた。(14)

重点施策とされたのは、

- ・若者の自立とたくましい子どもの育ち
- ・仕事と家庭の両立支援の働き方の見直し
- ・生命の大切さ、家庭の役割等の理解
- ・子育ての新たな支えあいと連携、の4つである。

さらに2006年以降の子育て支援施策には、ワークライフバランスの理念も枠組みの中に加えられた。2010年に決定した「子ども・子育てビジョン」では、目指すべき社会政策として、4本柱と12の主要施策が定められた。(15)

以上の変遷を遂げた上で、子育て支援制度の目的は、少子化への対策が主であった策定当初とは変わって、子育てを行っている保護者に加えて、今後保護者になっていく若者の地域・社会を含めた生活環境の改善、就労形態の維持や選択の自由を含めたワークライフバランスの充実を目的とするものになってきている。

②現代の子育て支援制度

現代においては、2012年に「子ども・子育て新支援制度(以下新支援制度)」関連三法が成立した。この内訳は、「子ども・子育て支援法」「就学前の子どもに関する教育、保育等の総合的な提供推進に関する法律の改正」「子ども・子育て支援法及び就学前の子どもに関する教育、保育等の総合的な提供の推進に関する法律の一部を改正する法律の施行に伴う関係法律の整備等に関する法律」である。主なポイントとして以下の点が挙げられる。(16)

- ・認定子ども園、幼稚園、保育所を通じた共通の給付及び小規模保育園等への給付の創設
- ・認定子ども園制度の改善
- ・地域の実情に応じた子ども、子育て支援の充実
- ・基礎自治体の実施主体
- ・社会全体による費用負担
- ・政府の推進体制
- ・子ども・子育て会議の設置

新支援制度の下では、これまで別組織として、認可や財政支援に差のあった、幼稚園・保育園・認定子ども園についての財政支援を一本化することと、幼保連携認定子ども園の普及を目指すものであるとしている。これによって前述にある待機児童問題の解決を狙うものでもある。また、保育所よりも少人数での保育事業として、地域型保育という活動が新たに行われるようになっている。地域型保育には4つのタイプがあり、「家庭的保育」「小規模保育」「事業所内保育」「居宅訪問型保育」とされている。連携施設を設定する必要があるものの、このような施設・事業が増加することで、待機児童問題の解決になるのではないかと考えら

れる。

支援の質を高める目的として、施設職員の配置改善や職員の給与や休日などの処遇改善についても、図られている。職員の充実を図ることで、1つの施設での受け入れ可能数の増加や、施設そのものの増加が見込める。

一方で新たな子育て支援施設の設定に対して、騒音を懸念する地域住民からの反対活動などの影響もあり、設定が中止となった園もある。子育ての地域連携を、目標とするなかでまずは子育てについての地域住民への理解を深めることも重要である。

(4)保護者と子育て

①子育てとは

子ども・子育て支援制度において使用される「子育て」という言葉はどのような意味で用いられているのだろうか。類似の言葉として育児という言葉があるが、こちらは「乳幼児を育てる」という意味合いで使われる言葉である。対して、子育てとは「乳幼児を含めた、子どもを育てる」といった広い意味での子どもを指して、使用される言葉である。そのために前述の制度においても、育児という限定期間の活動ではなく、子育てという包括的な言葉を使用しているのではないかと考えられる。なぜならば、育児支援とした場合では、将来親になる若者への支援という意味が薄れてしまうからである。

地域・社会が取り組む子育てとは、様々な人々と交流することで多様な価値観に触れて、かつ社会生活のルールを学ぶことにある。つまり、子どもの人間形成を行うことが、地域・社会の行う子育てであるといえる。

②子育てのありよう

子育てを行うなかで保護者が取り組む活動は様々である。第1に、子どもの生活を成り立たせるための活動である。具体的には、第1次欲求である生理的欲求を満たすものである。子どもに食事与え、就寝の世話することが特に必要な活動とされる。これは保護者にとっても必要な活動であり、人間が生きていく上で必ず求められるものである。第2に、子どもの成長・発達を促す活動である。これは、身体的な成長だけではなく、内面的な成長であり、将来に向けた技術的なスキルなどを身につけさせる活動である。具体的には、習い事や家事への参加・取り組み、人との関わりを持たせるなどである。第3に、子どもの生活する環境を豊かにする活動である。生活環境を豊かにする活動とは、物質的なものを充実させる活動ではない。また同様に、生活する地域の文化的、自然的な豊かさを指すものでもない。子どもが成長する中で、内面的な豊かさを育てることを目的とした活動である。具体的には、子どもとの関わりを形にすることや、関わりを記憶に残す活動などである。(図3参照)

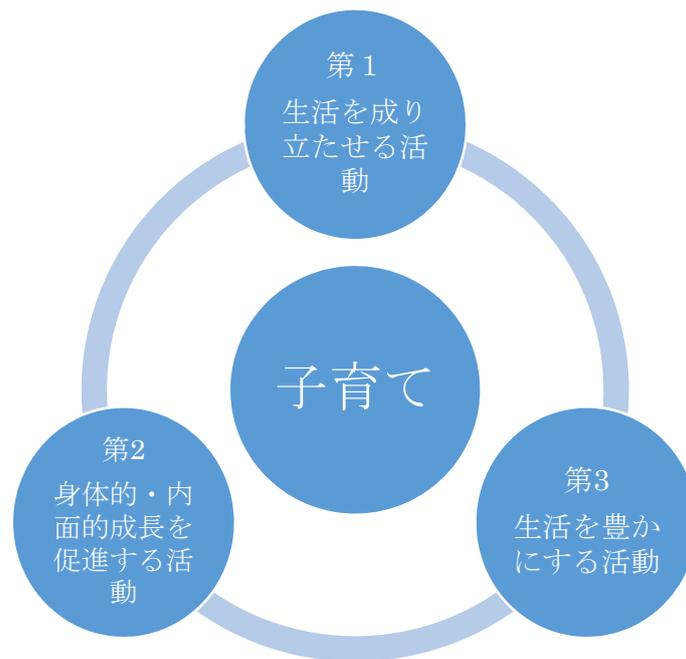


図 3 子育ての分類(筆者作)

上記 3 つの活動「第 1 生活を成り立たせる活動」「第 2 身体的・内面的成長を促進する活動」「第 3 生活を豊かにする活動」をそれぞれ組み合わせることで、子育ては成り立っている。上記の活動に「第 1～3」としているのは、上位項目から生命維持活動並びに生活において必要とされる項目であると判断したからである。第 1 の活動は、保護者自身も実施する必要があるために、子育てにおいても比較的实施し易い活動であると考えられる。第 2 の活動は子どもの自主性によって実行するかどうかの判断をする活動であり、保護者が直接関わることなく、外部の活動に参加させることで成り立たせることが可能である。第 3 の活動については、これとは異なると考えられる。第 3 の活動では、生活上必ず行う必要があるわけではなく、子どもの成長に関しても直接的なスキルや知識を得ることが出来るものではない。しかし、現代の子育てにおいては子どもの育つ環境を豊かにすることは、子育てにおける重要な活動であるとされ、保護者にとっても実施するべきであるとされる。

筆者は卒業論文で「おもちゃ」という題材を扱ったが、子育てにおいては「おもちゃ」という物に子どもの生活を豊かにする目的があるということ、「おもちゃ」選びを楽しんでいる保護者は子育ても同様に楽しんでいることがわかった。また、保護者自身の「おもちゃ」

との関わりについても、自信の記憶として残っていることがわかった。

第3の活動においては、子どもの生活を豊かにするという点と、実施している保護者の生活を豊かにする活動でもあるのである。

第3の活動の内容をまとめると以下のようなになる。

表 1 第3 生活を豊かにする活動

1	子育ての一環として、またはそれと平行して行われる。
2	子どもの生活、将来的な人間形成を豊かにする。
3	保護者の生活を豊かにし、子育てと共に楽しむことができる。
4	子どもの記憶に残る活動・物である。

上記の内容に当てはまる事象として、筆者の体験として写真・アルバムというものが当てはまるのではないかと考えた。具体的には、子育ての中で写真を撮影することで、記録として残すためにアルバムを作るということである。写真を撮ることは子育てと平行して行う事が可能であり、保護者にとっても趣味・嗜好の一環として行うことができる。また、写真を現像し、ものとして保存することで子どもが見直す機会を作ることになり、結果として記憶に残り易くなるのではないかといえる。

体験によるものであると記述したが、それは筆者の成育暦の中で、自身が被写体となった写真や家族の写真をまとめたアルバムを数多く作成してもらったこと、写真・アルバムを見直す活動を幼少期から家族の団欒として行ってきたことである。この経験は自身の家族との思い出形成に繋がり、保護者もそれを楽しんでいたように感じられる。

そこで、他の子育て中の家庭においても、同様の活動や傾向が見られるのではないかと考えた。カメラや写真に関する宣伝などでは、家族や子どもとの関わりについて触れた広告やCMなどが用いられる。また、子どもの成長を記録する方法としてのアルバム作りを推奨するような書籍なども販売されている。社会の認識として、子育てと写真・アルバムには関係性が成立しており、その関係はポジティブなものであるとされていると考えられる。

しかし、この写真・アルバムと子育ての関係性についての研究は行われておらず、その両者の関係性は明らかになっていない。写真・アルバムと子育ての間の関連性について十分な検討が行われないままにしていることを示している。これまでは、感覚的な判断の領域であった二つの関係性を明らかにすることは、子育て支援のさらなる展開に繋がるのではないかと考え、本研究を行った。

今回は特に子育て中の保護者と写真・アルバムとの関わりと子育て意識の関係性を明らかにする。また写真・アルバムの関わりと子どもの育ちへの影響という点について検討を行うこととした。これは、子育てに子どもと関わる機会が最も多い乳幼児期の子どもの子育て中の保護者に対して調査することで、子育てへの意識がより明確に現れると考えたからであ

る。また,子どもの育ちとの関係性を明らかにすることで,子育てにおける効果としての検討が行えると考えたためである。

【2】写真・アルバムの現状

(1)子育てと写真・アルバム

現代においては,写真・アルバム作成を行う活動が様々に行われている。活動としては様々なものが行われている。内容は子育て支援を目的としたものや,写真撮影やアルバム作りそのものを目的としたものが行われている。

以下に複数の例を提示する。

表 2 写真・アルバム講座一覧

写真・アルバム作り講座一覧			
講座名	対象	実施者	目的
子どもの自己肯定感を育むアルバム作り	小学生までの親子	スクラップブックング ハートフルラボ	自己肯定感の向上
アルバムカフェ	就学前児童と保護者	地域子育て支援センター	親子で楽しくアルバム作り
思い出の写真をキレイにまとめよう！ アルバム作り講座	対象年齢 18歳以上	山本写真整理教室	アルバム作りの基礎を学び、 アルバム大使になろう
かわいいわが子の手作りアルバム講座	1歳～就学前の子どもと親	アルバム作りで楽しい子育ての会	参加者同士の交流を深める
アルバム作り教室	女性限定、子連れ	アルバム作りサークル「honey mommy」	子育てママが楽しんで写真整理、アルバム作りができる
30年後に伝える写真(*)	乳幼児と保護者	ルカフォト写真教室	子育ての良い写真、きれいな写真を撮る
六甲道家族写真館	妊婦・乳幼児のいる家族、小学生以上の子どもがいる家族	神戸市立六甲道児童館	家族写真を撮る

表2のような子育て世代や子どものいる家庭を対象とした活動が,様々に行われている。実施者は子育て支援関連の施設や,行政,企業と様々である。活動の目的も,家族の思い出作りやアルバム作りの楽しさを知ること,または子どもの自己肯定感を高めることとある。多くの場合,写真・アルバムを作製することは楽しいものであり,保護者・子どもの双方にとって

良いものであると世間一般において認知されていると考えられる。

しかし、これらの活動が保護者並びに子どもに対して、なんらかの影響を与える傾向にあるのか、それについては明らかではない。効果が明らかではないながらも、多くの写真・アルバム作りやそれに関連した講座・活動はなぜ行われているのだろうか。

「30年後に伝える写真(*)」の項目については、実際に筆者が講座の見学を行い参加者の様子を観察した。参加者のほとんどは女性であり、またカメラを所持しているが使い方に慣れていないという人がほとんどであった。しかし、子どもの写真を撮るということに対して、意欲的であり、会場となった児童館を普段から利用していない保護者も多数参加しており、写真に対しての興味を保護者が抱いているといえる。

現代においては、写真・アルバムの作成は、家族(子ども・家族)に対して良い影響を与えるものであるという認知がされていると判断した上で、先行研究においてどのように捉えられているのか調査を行った。

写真・アルバムの持つ役割について、「子育てにおけるインターネット利用が一般的となる前の段階に利用されていた」と山田⁽¹⁷⁾は述べている。これは、「写真・アルバムを用いて行っていた子育ての情報発信を、現代においてはインターネットを用いて行うように変化したのではないかと述べていることからいえる。山田の述べるインターネット活用の理由は、子どもの成長を記録することと、自身の育児の経過を記述することによって、保護者の気持ちの整理を行う面も持ち合わせていると述べている。写真・アルバムにも同様の効果があるのかは、明確には論じられていないために不明だが、写真・アルバムの持つ役割を明らかにすることで、その意図を知ることができる。

一方で、子どもが成長していくにつれて子育ての情報発信としてのインターネットの利用が低下するように、これまでの写真・アルバムも同様に作成数が少なくなっていくと述べられている。この内容に関しては、実際の現代の保護者によるアルバムの所持数が具体的にどのようなものなのかについては明らかになっていない。

(2)写真・アルバムへの意識の変容

写真・アルバムが技術として一般的となる中で、人々の意識は変化していった。山田⁽¹⁸⁾は日本において人々が写真に抱く意識の変化を次のように述べている。

『写真が渡来した幕末の頃には、写真の撮影を行うのは専門家だけであり、被写体となることも人生の中でわずかに機会があるかどうかのものであった。また、写真に対しての理解や慣れもまだ進んでいなかったためか、現代のような表情を見せるという慣習はなかったようである。戦後になり 1960年代にはカメラの大衆化が進み、撮影される機会も徐々に増えていった。さらに 1970年代にはカメラ技術が大きく進歩し、撮影がより容易なものになっていった。そこで、これまで専門知識・技術を必要としたカメラから、より多くの一般大衆向けのカメラという認識が広がっていった』

現代の写真・アルバムの作りの講座やその目的について一部のものを調査したうえで、文献の調査を行ったが、明確に子育てや家族関係との関係性について、明らかにしている内容のものを確認することが出来なかった。つまり、両者の因果関係は明らかになっていないといえる。

しかし、写真・アルバム作りについての講座や教室は開かれて、その実施目的は子どもの成長と保護者への支援の意味があると捉えられている。明確な根拠が示されていない現状に対して、効果を明らかにすること、今後さらにより良い活用の道が生まれるのではないかと、文献の調査を行ったうえで考察した。

そこで本研究において、写真・アルバム作りが子どもの育ち、並びに保護者にとってどのような意味を持つものとして捉えられているのかの現状と、その影響を明らかにすることで、今後の子育てのありように、ひとつの意義を見出せると考える。

1.研究目的

写真・アルバム講座などが一般的になり,特に子育てと関連した内容で多く行われている。しかし,2つの因果関係は明らかではない。この二つの関係性を明らかにすることを,研究背景とし,以下に研究目的を記載する。

【1】「写真・アルバム」と育児の関係性を明らかにする

(1)写真・アルバムを所持,作ることの意義

子育てにおいて,写真・アルバムを作成することは,写真の撮影やアルバムによる保存が容易になっていくなかで,子どもや家族の写真を撮り記録する行為として一般的となっている。子どもの写真を撮ることやアルバムを作ることは,現代において子育て活動の一つと認識されているのではないだろうか。しかし「写真を撮ること,アルバムを作ること」と「保護者が子育てについてどのような意識を抱いているのか」は明確な関係性が明らかにされていない。そこで,まずは子育て中の保護者と写真・アルバムの作成することの現状について,その実態を把握する。次いで写真・アルバムを作成することと子育て意識・行動との間にどのような関連性があるのかについて明らかにする。さらに写真を撮ること,アルバムを作ることが,保護者に子育てへの意識に関係しているのか子育てにおける写真・アルバムとの関わりが,保護者にとってどのような意義を持つのかを明らかにする。

(2)大学生の育ちと「写真・アルバム」の関連性について明らかにする

また,青年期に入り家族との関わり方が乳幼児期から少年期までのものとは異なっている大学生にとって,自身の養育歴の中で写真・アルバムと関わってきたことが,現在の彼らにどのような影響を与えているのかについても明らかにする。このために,保護者を対象とした時と同様,大学生と写真・アルバムとの関わり方の現状についての把握も行う。養育歴の中で写真・アルバムとの関わりが,家族感並びに自己肯定感といった内面的な成長に何らかの影響を与えているのか,子どものより良い育ちへのきっかけを明らかにすることに貢献できるのではないだろうか。そこで,養育歴の中で写真・アルバムとの関わり方の頻度や体験が,青年期に入りどのような効果を残しているのかを明らかにする。

(3)子育て支援ツールとしてのアルバムの有用性について明らかにする

子育てにおいて写真・アルバムを用いることは,保護者と子どもの双方にとってどのような意義を持つものになっているのか,また具体的に保護者・子どもに対して意識・行動の面

でどのような影響を与えているのか、大きくこの二つの点について明らかにする。その結果から、育児に対してより積極的な関わりを生み出すきっかけを作ることを目的として、育児支援ツールとしての写真・アルバムの有用性について検討するものとする。

この結果から写真・アルバムが子育てに対して何らかの効果を与えると明らかになった場合、今後の写真・アルバムの活用方法を検討し、よりよい子育てをつくりだすことに寄与できるものとする。

【2】 教育的意義

(1) 家庭科教育における活用

家族の関係性や自己形成に対して、写真・アルバムが何らかの影響があると明らかになった場合、その効果について学校教育のなかで触れることはできないだろうか。

家庭科の領域では、家族といった内容に触れるため活用の機会は大いにあるといえる。家庭科において、取り扱われている内容に「家族」分野が存在する。授業の中でも写真・アルバムを有効に使うことが出来るのではないだろうか。

児童・生徒の写真・アルバムを用いることで、乳幼児期における家族との関わりや、これまでの思い出を振り返ることに繋がり、自分にとっての家族について考える機会を作ることになる。

また、子育てにおける写真・アルバムの有用性が明らかになった場合、子どもとの関わり体験の一環として写真撮影やアルバム作成を行うことで、より実践的な体験学習をすることが可能である。中学生への家庭科における保育分野の授業として、親準備性教育の要素を取り込むことで、家族機能や家族生活における役割の理解につながるといえる。具体的な例として、保育分野の授業において行われる幼児との触れ合い授業などにおいて、活動の写真を残し、アルバム作りを行わせる。結果として学習と触れ合い体験の振り返りを同時に行うことが可能になる。

これは技術・家庭の家庭分野の新学習指導要領に記載されている「A 家族・家庭生活」で実践可能である。これは平成 23 年 3 月に公示された新学習指導要領において明記されている「生きる力」を育むことにつながるきっかけになる。

【3】 目的まとめ

上記の点より本研究における目的を以下に列挙する。

- ・写真・アルバムに関連した活動(撮影・保存)を行うことの、子育て中の保護者にとっての意義を明らかにする。
- ・保護者の子育て感や育児不安と、写真・アルバム活動との関連性を明らかにする。
- ・養育歴の中で写真・アルバムと関わることで、子どもの育ちにどのような影響を与えるのか、現役の学生に対しての調査から明らかにする
- ・上記三つの結果から写真・アルバムの子育て支援ツールとしての有用性を検討する。

【4】研究における定義

研究を行うに当たり、本研究における写真・アルバムの定義づけを行った。これは、現代において撮影方法や写真の保存方法が多様になったことが要因である。

本研究における写真とは、フィルムカメラにより撮影されたものから、デジタルカメラやスマートフォンなどで撮影されたものを含めた、閲覧可能な状態で保存されているものについて取り扱うものとする。これは写真を撮影する機器がデジタル化したことで、機器に保存された状態であっても写真として認識されるようになったためである。そのために、現像されたアナログ写真とデジタル写真を同様に扱うこととした。

また本研究におけるアルバムとは、写真の保存に用いる冊子のことである。そのため、現代になり利用されるようになりつつある、デジタルデータを保存する目的でのアルバムは今回定義の中には含めない。これは、デジタルとしてのアルバムは保存に重きを置いたデータ集約としてのアルバムであり、アナログのアルバムに比べ閲覧という点での使用はあまりされていないと考えたためである。

2.研究方法

【1】文献調査

(1)写真・アルバムについて

写真・アルバムの歴史と意識の現状の把握の一貫として、先行研究となる文献の収集を行った。調査を行った文献は、写真・アルバムとの関わりの歴史の変遷や技術の進歩について扱ったものである。また、子育てとの関係としての写真・アルバムがどのようなものであるかについてどのように述べているのか、内容の精査を行った。

【2】予備調査

アンケートの配布・回収を行う際には、回答への合意が得られた方のみアンケートへの回答をしてもらい、回答結果の情報は研究目的以外に使用しないことを伝えている。

本調査を行うための探索的な意図を持ち、予備調査を行った。

(1)予備調査概要

アルバムと子育てについての直接的な先行研究がほとんど行われていなかったために、実情の把握と質問項目の検討をかねた予備調査を行った。

予備調査においては、調査対象・地域の設定が不十分であったので、以降の調査ではこの結果を参考に対象と地域についての検討を行った。子育て講演会に参加した保護者に対して配布を行い、回収数 153 枚のうち有効回答 146 枚を分析の対象とした。また調査時期は 2016 年の 3 月である。

①調査目的

写真・アルバムとの関りと育児への意識と並びに子どもの育ちへの影響について明らかにするために、関連した内容の先行研究が行われていないかの調査を行った。しかし写真・アルバムと子育てに関する研究が国内でほとんど行われていないために、参考となる先行研究が十分ではなかった。よってアンケートを用いる場合にも、十分な内容検討ができないのではないかと考えた。

そこで、探索的に予備調査を行うこととした。予備調査の目的は、現代の保護者の写真・アルバムとの具体的な関わり方、写真の撮影・閲覧の頻度や撮影に使用する機器、所持するアルバムの内訳について質問を行った。その上で、アルバムと育児意識の関係性を明らかにし、アルバムが育児を行う上で意味を持っているのか、影響を与えているのか明らかにする。

②調査対象

京都府の育児講演会の参加者に対してアンケート用紙を配布し任意で回答をしてもらった。回収は 153 部,回収率は 51.0%であった・回答数が設問数の半数に満たない回答を除外した 146 名（女性 132 名,男性 14 名,平均年齢 42.6 歳）を分析対象とした。

③調査時期

2016 年 3 月

④調査項目

以下に調査での質問項目を掲載する

プロフィール

- ・性別
- ・年齢
- ・結婚の有無
- ・子どもの人数と年齢
- ・就業状況

写真・アルバムと関わりの現状

- ・子どもの写真を撮るときに使用する機器とその頻度について(4 件法)
- ・これまでに写真屋に撮影してもらったことがあるか(複数回答可)
- ・撮影機器ごとの現像頻度(4 件法)
- ・デジタルデータを写真にしていると思うか(4 件法)
- ・なぜ写真にしているのか(複数回答可)
- ・なぜ写真にしないのか(複数回答可)
- ・種類ごとのアルバム所持冊数(7 件法)
- ・アルバムの子どもの写真はどのようなものを貼っているか(4 件法)
- ・機器ごとの写真データを見る頻度について(4 件法)
- ・デジタルデータと写真は,どちらが優れていると思うか(4 検法)(4 件法)
- ・子育てについて(4 件法)

【3】本調査

アンケートの配布・回収を行う際には,回答への合意が得られた方のみアンケートへの回答をしてもらい,回答結果の情報は研究目的以外に使用しないことを伝えている。

予備調査を行い得られた結果を元に改めて質問項目の精査を行い,調査地域・対象を複数にした上でより具体的な条件を加えている。

(1)保護者向け調査概要

予備調査において,調査対象を子育て中の保護者としており,その家庭状況については回

答者の子育ての状態に差が生まれてしまった。また調査を行った場所も、一地域の一会場の
みとなってしまった。そこで調査対象と地域の設定を改めて検討し、調査を行った。

①調査目的

子育てを行っている保護者を対象とした、写真・アルバム関係と子育て意識の関係性につ
いて【予備調査】にて明らかにした。しかし、予備調査では調査対象となる家庭における子
どもの年齢にバラつきが多く、調査を行った地域も一つのみであり、配布場所も育児講演会
会場のみと、極めて限定的なものとなってしまった。そこで第二回目となる本調査では、調査
対象と地域、配布方法の変更を行った。

今回の調査における目的は、以下3点である。

- ・保護者と写真アルバムに関係した現状と具体的な動向を明らかにする。
- ・「写真・アルバム」との関わり方と子育て意識並びに行動との間の関連性について明らか
にする。
- ・写真を撮ること、アルバムを作ることが、保護者の子育てへの意識に関係しているの
か、保護者にとっての意義を明らかにする。

②調査対象

調査対象としたのは、アンケートへの回答段階において乳幼児を育児中の保護者である。
この乳幼児については、第一子であるか第二子であるか等は制限を設けていない。これは育
児を行う期間において、乳幼児の時期が最も保護者の意識が向けられる時期であり、撮影の
被写体として選ばれ易いと判断したためである。

また調査を行ったのは、大阪府豊中市内の保育園並びに認定子ども園、兵庫県姫路市内の
幼稚園を調査場所として設定した。調査都市を複数としたのは、両都市が都市の性質として
大都市近郊と中間都市の違いがあり、文化や慣習に差があるのではないかと考えたためであ
る。また、調査を行った施設を複数種としたのは、施設によって乳幼児を預かる目的が異なり、
保護者の就労状況によっても、どの施設を利用しているのか異なると考えたためである。

配布数は800部、回収数は649部、回収率は81.8%であった。

③調査時期

2016年7月～8月

④調査項目

プロフィール

- ・性別
- ・年齢
- ・結婚の有無
- ・子どもの人数と性別

・就業状況

写真・アルバムの関わりについての現状

- ・子どもの写真を撮るときに使用する機器について(4件法)
- ・撮影したデータ,フィルムを現像しているかどうか(4件法)
- ・写真を現像していると思うか(5件法)
- ・現像された写真の持つ利点について(4件法)
- ・現像された写真の持つ短所について(4件法)
- ・自宅に写真・アルバムは何冊程度あるか(7件法)
- ・アルバムに貼っている子どもの写真はどのようなものか(4件法)
- ・写真やデジタルデータを見る頻度について(5件法)
- ・現像された写真とデジタルデータの比較(4件法)
- ・子育てについて(4件法)

(2)大学生向け調査概要

アンケートの配布・回収を行う際には,回答への合意が得られた方のみアンケートへの回答をしてもらい,回答結果の情報は研究目的以外に使用しないことを伝えている。

保護者を対象とした調査では,子育てを行う意識との関連性について明らかにすることを目的とした。大学生を対象とした調査では,生育暦の中で写真・アルバムと関わるのが現在の自己形成と関係するののかについて明らかにする。

①調査目的

子育ての中での写真・アルバムとの関わりと保護者の育児意識への関係を調査検討する中で,実際に養育歴の中で写真・アルバムと関わることと子どもの成長との間に関係性が存在するののかについて明らかにしたいと考えたためである。

そこでこの調査における目的は青年期にあたる大学生の養育暦の中での写真・アルバムとの関わりが,現在の自己効力感³⁾に対して,関係があるのかもしくは増減の影響を与えているのか明らかにすることである。また,家族への愛着形成など,家族関係に与える影響についても明らかにすることが目的だ。配布数 500 部, 回収数 354 部, 回収率 71%であった。

アンケート作成において、鈴木らによる家族環境の測定尺度⁽¹⁹⁾と成田らによる自己効力感尺度⁽²⁰⁾を参考とした。

②調査対象

国立大学法人大阪教育大学に通う学生

③調査時期

2017年1月

³ 個人がある状況において必要な行動を効果的に遂行できる可能性の認知を指す。

④調査項目

プロフィール

- ・性別
- ・学年
- ・兄弟(姉妹)の有無(人数)
- ・兄弟(姉妹)の何番目か

写真・アルバムの関わりについての現状

- ・現像された写真やデジタルデータを見る頻度はどれくらいですか？(5件法)
- ・あなたご自身で写真を撮るときに,主に使用しているものはなんですか？(5件法)
- ・撮影したデータを写真として現像していますか？(5件法)
- ・あなたは自分自身で,デジタルデータを写真に現像している方だと思いますか？(4件法)
- ・どのくらいの頻度で現像していますか？(4件法)
- ・あなたは現像された写真を使用するアルバムを作製していますか？(4件法)
- ・写真との関わりについて(4件法)
- ・写真やアルバムを見ていて,良いと思う点はどのようなことですか？(4件法)
- ・自宅に以下の写真アルバムは何冊程度ありますか？(8件法)
- ・デジタルデータとアルバムは,以下の点において,どちらが優れていると思いますか？(4件法)
- ・家族についてお聞きします(4件法)
- ・あなた自身のことについてお聞きします(4件法)
- ・自身の子どものころのアルバムについて何か思い出はありますか？(自由記述)

以上の研究方法を用いて研究を行うものとする.

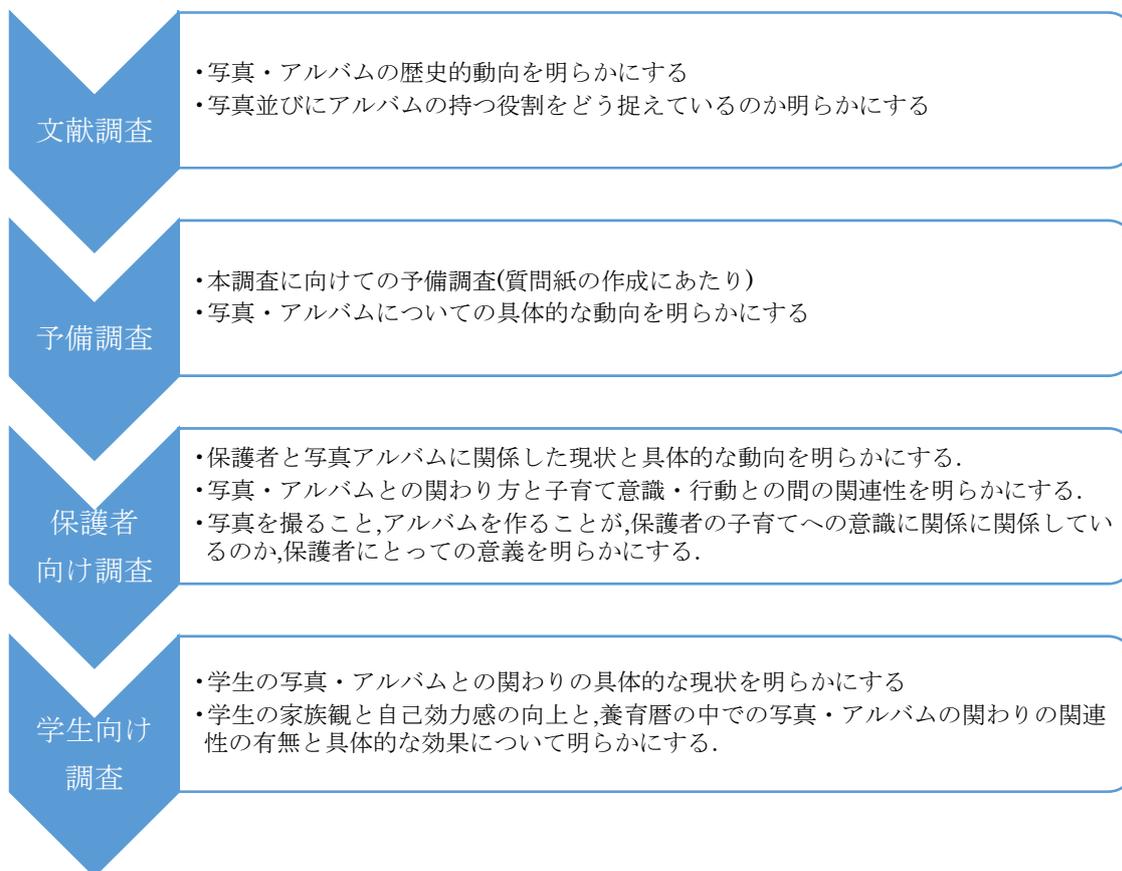
(3)調査紙の参考

調査紙の作成に当たり,保護者の子育てへの意識と写真・アルバムとの関係を明らかにするために保護者の育児不安尺度の選定をすることにした. そこで育児ソーシャル・サポートの因子を抽出し,調査紙の設問作成の際の参考とした.

学生向け調査においては,写真・アルバムとの関わりが大学生の自己形成に対して影響が在るのか,在るのであればどのような点に関係性が在るのかを明らかにする・質問紙作成の参考としたのは,子どものパーソナリティ発達についての尺度と自己効力感尺度の因子である・この二つの点からそれぞれ因子を抽出し,質問紙の設問作成の参考とした.

以下に研究方法の一連の流れを表として表す.(表3参照)

表 3 研究の流れ



3.調査結果

【1】文献調査結果

(1)日本における写真・アルバム

①歴史の変遷

写真の発祥は、13～16世紀のヨーロッパに遡る。13世紀に現代カメラの原型となる原理が生まれた。これは、写真として記録するための技術ではなく、レンズ越しに映る映像を投影するための技術であり、絵画や観察のために用いられた。その後投影技術の発達と共に、19世紀に入り投影した映像をそのまま記録する技術が発明された。当時の写真は絵画として記録していた情景を、ありのままの姿として記録することが目的とされて研究されていた。世界最古の写真を撮影し、記録として残したのはジョゼフ・ニセフォール・ニエプスである。その後ニエプスの発明した技法とは異なる撮影技術が次々と確立されていき、19世紀前半にはヨーロッパ中に広まっていった。

撮影した写真の保存方法として現代では、冊子状にまとめる方法と書籍のような形にして残すという方法が取られている。冊子状にしたものについては、一般的にアルバムと呼称されている。アルバムは写真の入れ替え等が自由に行えるものであり、個人での作成ができる写真集である。アルバムとして写真集がはじめて製作されたのは、イギリスのアンナ・アトキンズという女性の製作した「イギリスの海藻の写真」であった。⁽²¹⁾⁽²²⁾

その後、記録上においては江戸時代に長崎の上野俊之丞が、日本で初めてカメラを購入したことになっている。幕末から明治維新にかけての期間においては、肖像画として写真を撮る武士がいた。しかし、当時はカメラに対する認識が一般に広がっておらず、魂を吸われるなどの迷信が信じられていた。またカメラの撮影技術・知識を学ぶには、来日している外国人の知識人などから学ぶ必要があり、すぐにカメラ文化が浸透したわけではなかった。現代の写真屋に近い、肖像写真館が設立されたのは、同幕末期の長崎であった。

明治期に入り、カメラの撮影技術を持つ人によって、欧米文化を取り入れた、近代化の記録と日本文化の記録を目的として写真が撮影され、海外向けの宣伝物として風景写真のアルバムが販売され始めた。⁽²³⁾

その後写真は、芸術的な作品や広告宣伝物、情報提供の手段として用いられるようになり、写真館と言われる撮影場所のある店舗が生まれて、写真雑誌などが発行されるようになっていった。しかし、カメラなどの撮影機器が高価であったことによって、日常的に写真撮影を行っていた人は少数であり、専門知識を持つ人などの一部の人の趣味・嗜好の一つであった。

(22)

現在では写真は色鮮やかなものである。カメラの普及当初は基本的にモノクロ写真が主流であった。カラー写真の撮影は既に可能となっていたが、フィルムそのものが高価であったために、一般では使用されることがなかった。価格を抑えた一般用カラーフィルムが販売されるようになったのは、1950年代後半のことである。その後高度経済成長期の中で、プロ写真家ではない、いわゆるアマチュア写真家が増加し、アマチュア用カラーフィルムが販売

されるようになった 1960 年からカラーフィルムの需要は増加していった。しかし、現在では写真フィルムの生産・出荷台数はピーク時よりも低下している。その原因はフィルムカメラが主流だった時代から、デジタルカメラが主流となったためである。デジタルカメラでは、フィルムを使用する必要がないため、消費・生産台数ともに低下していると考えられる。株式会社富士フィルムホールディングスによる発表では、フィルムの需要数についてこのような結果が出ている。(図 3-11 参照)

この結果からもわかるように、撮影機器としてのフィルムカメラは現在では需要が低下しており、その他デジタルカメラなどを用いた撮影が主流となっているのである。

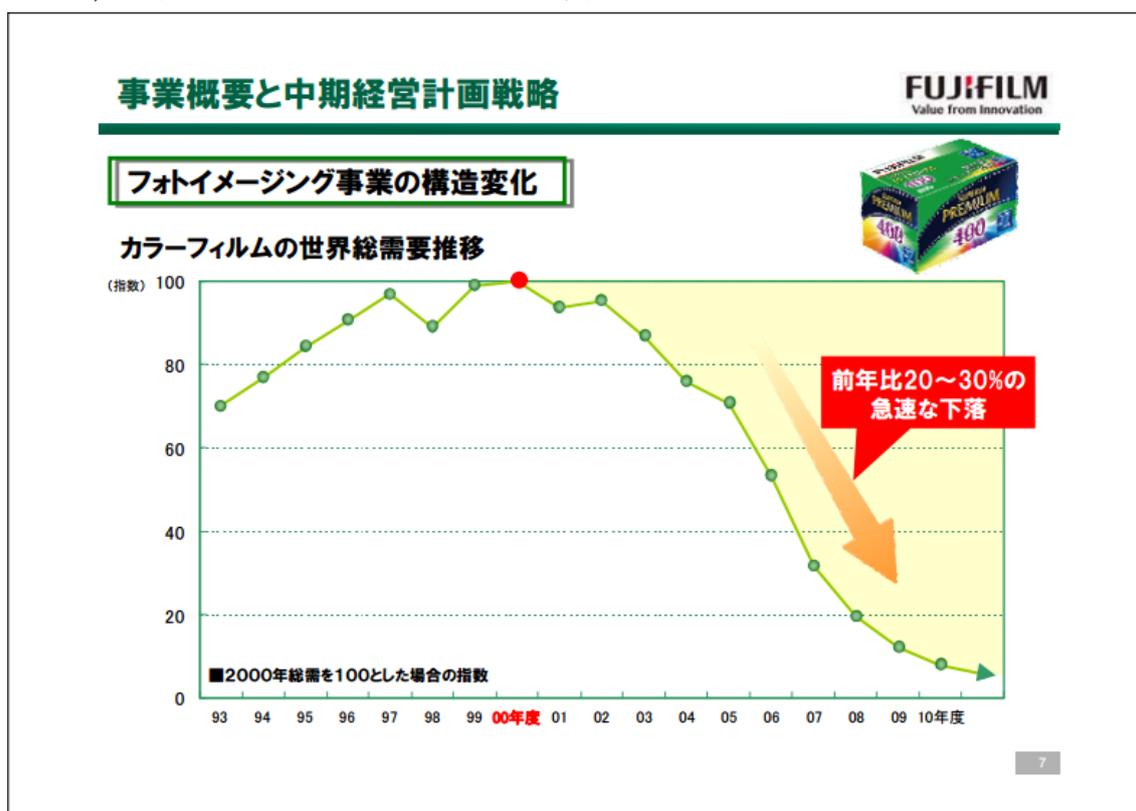


図 3-11 カラーフィルムの世界総需要推移 富士フィルムホールディングス株式会社(25)

②技術発達による変化

現代ではデジタルカメラ(以下デジカメ)やスマートフォンなどが普及し、写真をアナログのフィルムではなくデジタルデータとして保存できるようになった。これにより、撮影並びに保存という行為が容易になり、写真という物がより一般的で身近になっている。また、カメラそのものが低価格したことや、使い捨てカメラやインスタントカメラなどの比較的使用のハードルの低い撮影機器が作られていたことも原因として考えられる。

個人が写真を撮る際に、最も身近な被写体となるのは、自身の生活に関連したもの並びに家族もしくは子どもである。また、携帯電話に写真撮影の機能が付随されるようになり、写真のやり取りを通してのコミュニケーションが行われるようになった。これは、インターネット

トの発達により SNS といったサービスが普及したことも大きく影響している。

撮影機器の進歩と低価格化,また保存の容易さによって,写真撮影という行為が一般化したことで,大量の写真が撮られるようになった。しかし,主としてフィルムを使用していた時代は,撮影後には現像するという行動までが写真撮影という行為の流れであった。保存方法がデジタル化したことで,写真撮影をした段階で,既に保存も完了していることになった。結果として写真を現像する人が少数になっていると考えられる。

(2)写真・アルバムの動向

①家庭における消費傾向

撮影機器のデジタル化と小型化によって,写真の撮影・保存が容易になりより多くの人が関わるできるようになった。結果として手軽な趣味・嗜好としての位置づけを現代の写真はもっている。そこで現代家計消費におけるデジカメの位置づけを知るために,総務省統計局が行っている家計調査における分類を調査した。結果デジカメの位置づけとしては,教養娯楽という項目に含まれている。よって写真撮影活動とは,家計的な面から見ても嗜好・娯楽活動の一環であるといえる。また,消費動向調査においては,デジカメの分類は主要耐久消費財とされており,家庭において主要なる物としてデジカメが認識されていることを示している。

内閣府による消費動向調査では,デジカメの世帯普及率は2015年度から2016年度にかけて低下している。数値としては,2015年度時点で普及率は75.6%であり,2016年度では69.0%となっている。国内においては,デジカメの普及率が低下の傾向にあるのではないだろうか。普及率の最大は2013年時点の77.0%であり,以降徐々に低下している。⁽²⁶⁾

②企業による動向

企業においては,カメラに関する需要が変化しており,戦後から現在に至るまで事業形態も大きく変化した。株式会社富士フィルムホールディングスによる発表では,カラーフィルム需要の低下による売上げの低下,写真店の数とその認知度が低下しているとしている。⁽²⁷⁾一方でスマートフォンの普及による撮影頻度の増加によって撮影数は,フィルム時代の20倍となったとしている。結果大量に撮影されたスマートフォンによる写真プリントサービスを展開するなど,カメラではなくスマートフォン利用者へ向けたプリント需要を創出しようとしている。また,従来の写真店とは異なるプリントサービスへ重点を置いた直営店を展開し,消費者が利用したいと思える付加価値プリントを行う店舗の創設を行うようになっている。合わせて主たる目的としての,「撮る,残す,飾る,そして贈る」写真の持つ楽しみ方の普及を目指している。

写真撮影を行う企業では,「子ども写真館」と言われるスタジオが数多く展開されるようになってきている。国内最大大手の「子ども写真館」は株式会社スタジオアリスである。撮影のメニューを複数から選択することができるようになっており,メニュー毎に衣装を選び撮

影してもらうことが可能になっている。撮影メニューの内容は、子どもの成長に合わせた行司ごとに設定されており、子どもだけでなく家族のお祝い事なども含めた「ハレの日」の記念として利用されている。

プリント需要とカメラの普及率が低下している現代において、写真館といった撮影を主としたサービスが数多く展開され、かつ消費者による需要があるという状況から、写真・アルバムを作成し・所持することが必要とされ、所有したいと思っている人が一定数存在していることを示している。つまり、デジタルカメラの普及率の低下は写真への需要の低下をしめすものではないといえる。

また、現代において普及しているスマートフォンやタブレットなどを対象とする、撮影に関連したアプリケーション(以下アプリ)も多く配信されている。それらは、撮影に用いるカメラアプリの他に、写真の加工編集を目的としたものや、保存サービスを行うアプリも存在している。フィルムカメラやデジカメの時代から、スマートフォンを用いる時代になり、写真撮影はより手軽に、より多様なスタイルで行うことができるようになってきている。携帯電話メーカーもカメラ機能の充実を宣伝内容の一つとしていることから、撮影機器としてのカメラはスマートフォンに比べ需要が低下していくといえる。

(3)まとめ

カメラの原理技術が発明されてから、すでに長い年月が過ぎ、一部の専門的な知識を持つ人のみが可能であった撮影は徐々に大衆へ向けたものへ変わっていった。大衆が撮影という行為を行えるようになったのは、手順や道具が簡易且つ容易になったことが要因である。写真の持つ特性が特別な思い出を記録する質的なものから、日常を記録する量的なものへと変化したこともその表れであると感がえられる。この流れは、撮影に用いる機器がカメラから、日常に使用するスマートフォンに役割が移行していくなかでさらに顕著になっていくといえる。

現代では写真の撮影が個人で十分に可能となり、撮影の機会や枚数の制限がほとんどなくなった現代においても、写真業者は未だに数多くある。これは、子育ての中の記念日であるハレの日に写真業者を利用するなど、特別な日の記録を残すという意味での写真は、現代においても必要とされているということだろう。保護者にとっての子どもの成長の記録を残すことが大切な思い出作りになっているということの現われであると考えられる。

では、特別な記録として写真を残すことは保護者にとってどのような効果を持っているのだろうか。写真業者は子育ての思い出作りとしての写真の宣伝を行い、保護者向けのアルバム作り講座が多数行われているが、写真撮影やアルバム作りが保護者にとってどのような影響を与えるのかについて、各文献の中では明確にはされていない。

よって写真・アルバムに関わる当事者に向けたアンケートを行い、写真・アルバムとの関わりにより、子育てへ影響が在るのか、またどのような影響があるのかを明らかにする。

【2】 予備調査結果

子育て講演会に参加した子育て中の保護者を対象に、写真・アルバムとの関わり現状と子育てについての意識についてのアンケート配布した。回収数 153 部のうち有効回答 146 部の集計結果が以下の通りである。各グラフの N 数は、有効回答を示している。

(1) 写真を撮る際の使用機器割合

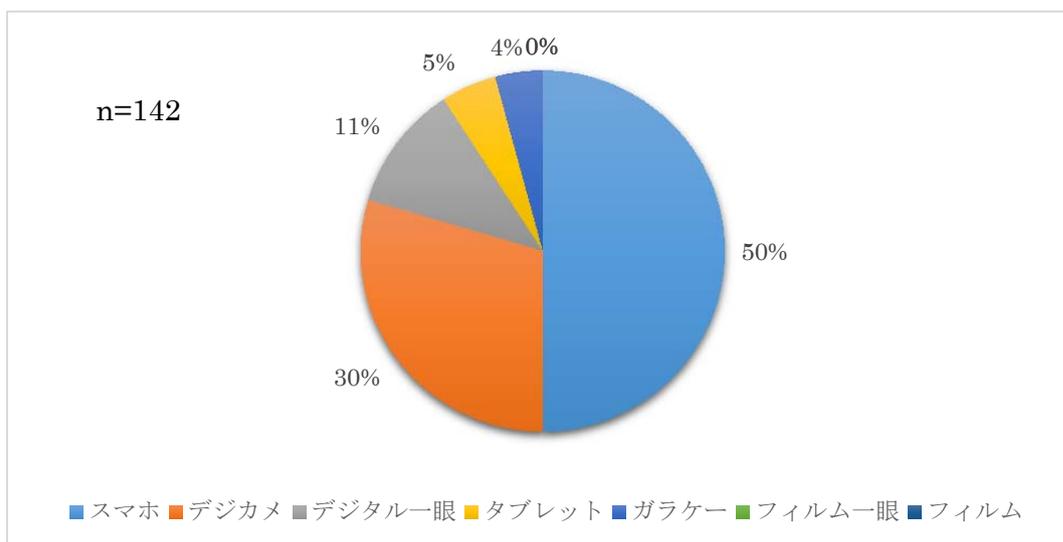


図 3-2 1 写真を撮る際の使用機器

写真を撮るときに使うツールとして、「よく使う」と回答したものは「スマホ」と回答した人が最も多く全体の 50%を占めた。ついで、デジカメ及びデジタル一眼が多かった。タブレット（5%）は持ち運びに際して大型であるために撮影という点で避けられたと考えられ、

ガラケー（4%）は所有者が少なかったために選ばれなかったと考えられる。またフィルムカメラや一眼レフなど、アナログ機器を使用すると回答した者はいなかった。

(2)撮影データを現像するか(全体総数)

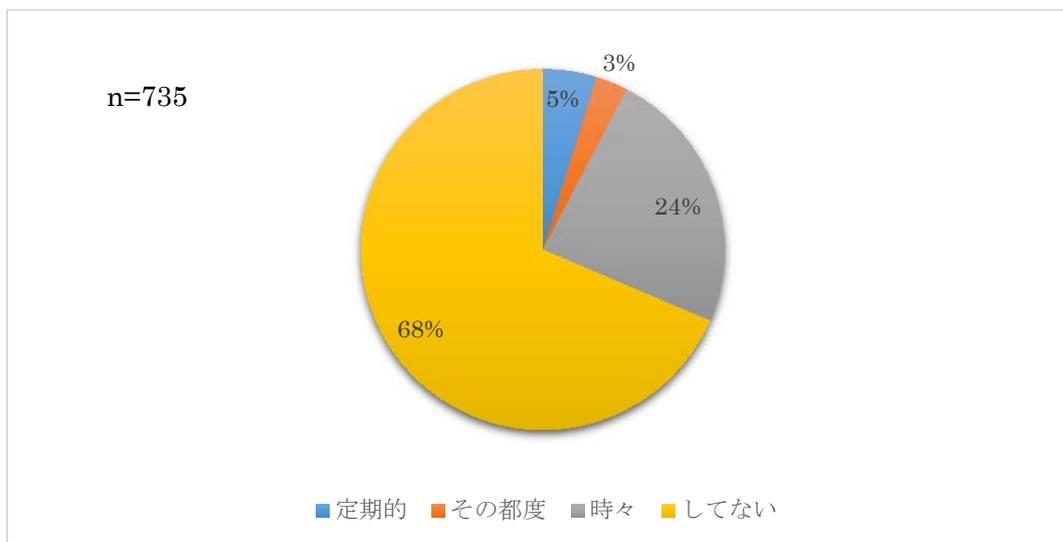


図 3-2 2 写真のデータを現像するか(全体合計)

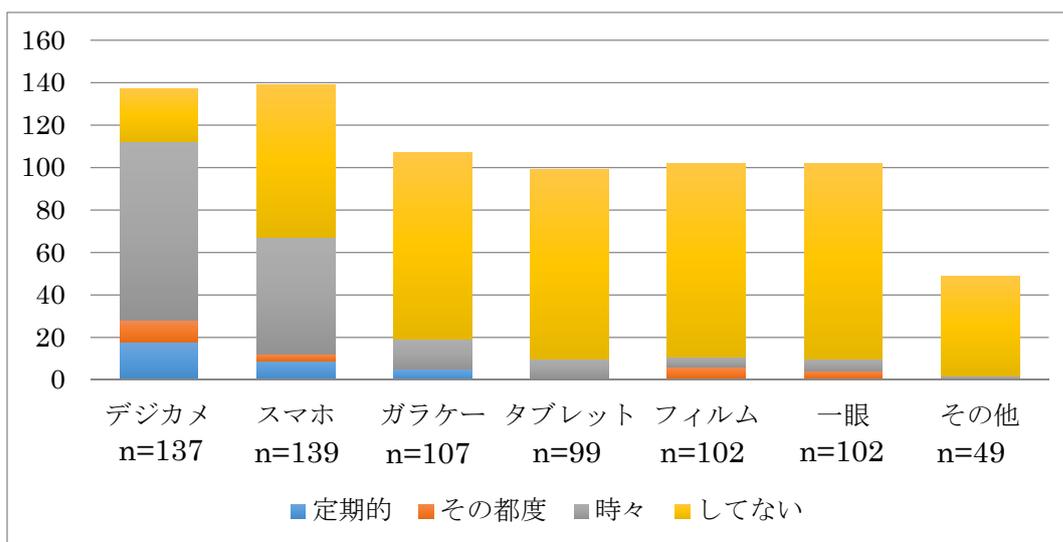


図 3-2 3 写真のデータを現像するか(機器ごと)

回答者の多くが定期的な写真の現像をしておらず、写真を撮ることがあっても、その後の保存はデータでしか行っていないことが分かる。つまり写真自体を現像することがないこと、さらに紙媒体でのアルバム作成もあまり活発には行われていないものと思われる。

現像しているかどうかを、機器毎に比較した場合、撮影したデータの現像については、最も撮影機会の多かった「スマホ」よりも「デジカメ」の方が多かった。これについては、スマートフォンでいつでも気軽に撮影出来るという状況が、子どもの成長の記録という点での写真の価値を引き下げてしまった可能性が考えられる。

(3) 写真を現像している理由

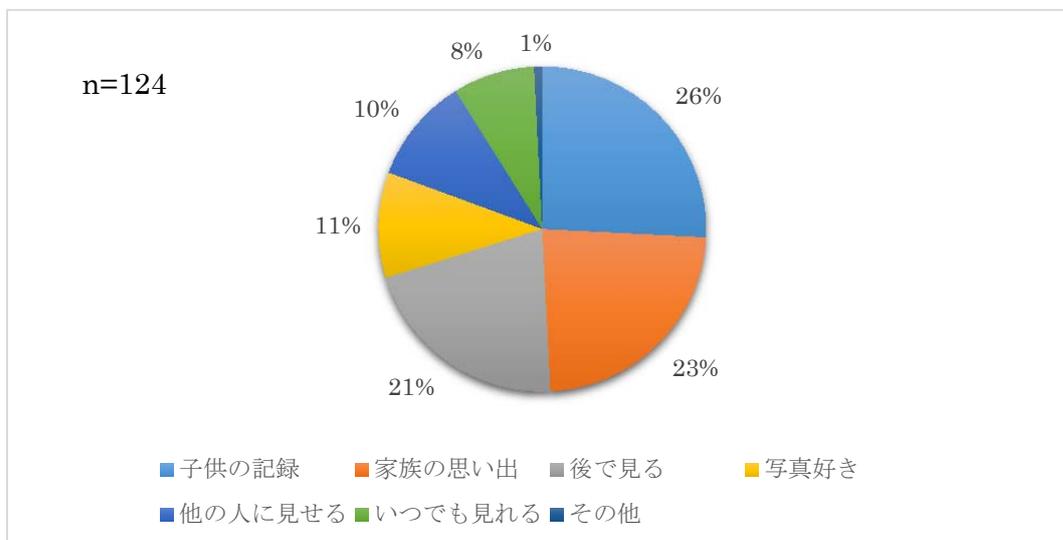


図 3-24 写真を現像している理由

写真を現像している理由としては、「子どもの記録」「家族の思い出」と回答する割合が高く、記録媒体としての面を重視していると考えられる。いつでも見ることができるという回答が少なかったのは、データ媒体であっても、その利点が失われることはないからであると思われる。

(4) 家庭のアルバム所持数

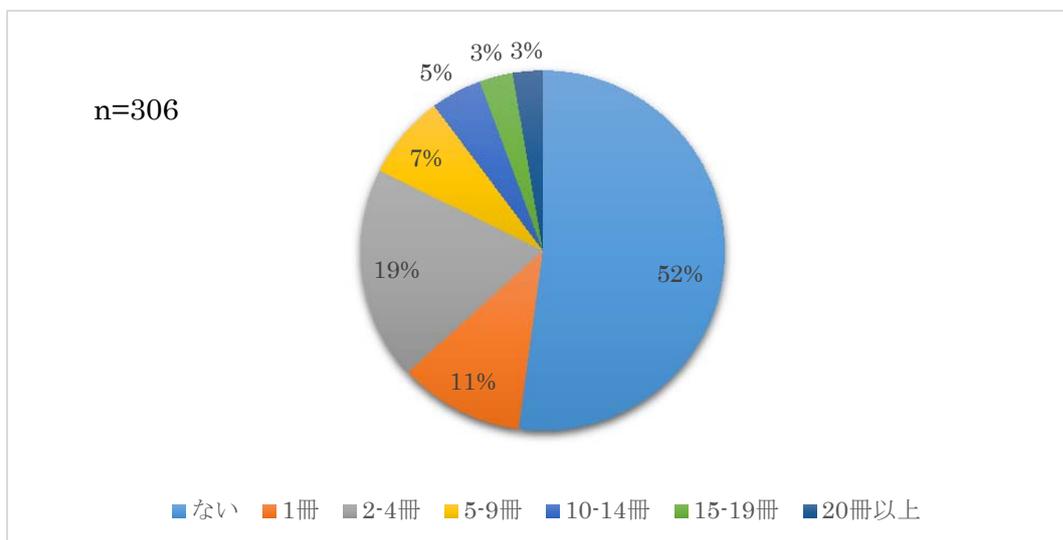


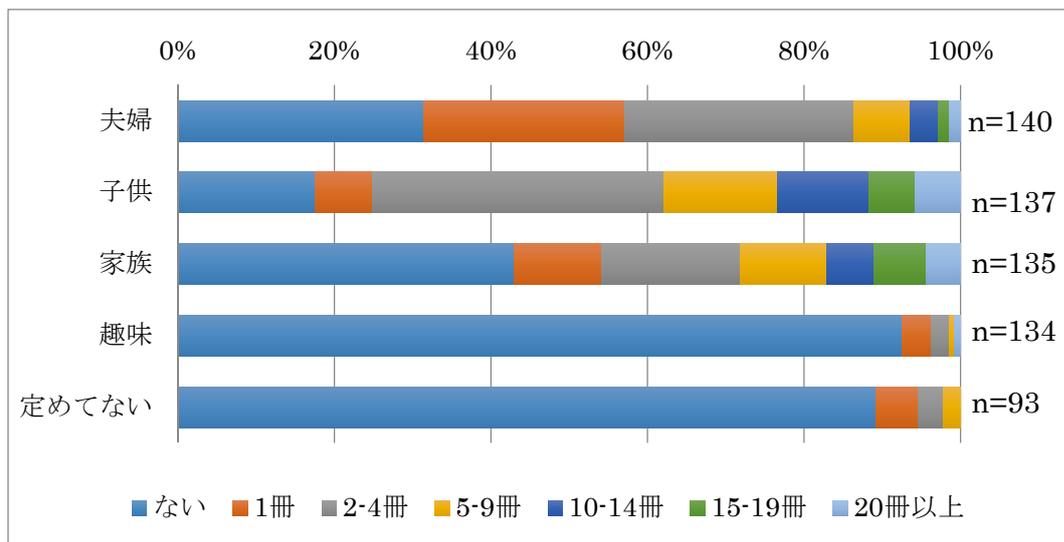
図 3-25 家庭のアルバム所持数(アルバムの種類ごとの合計)

回答者の全体のうちアルバムが無いと回答した人が半数以上いることから、アルバムを作成する習慣が薄れてしまっているのではないかと考えられる。

一方で、10冊以上アルバムを所持していると回答している家庭もあり、作成に対して熱

心な家庭も存在していることがわかる。「2～4冊」という回答した保護者も比較的回答者がいるが、これは子育ての限定的な期間だけ写真を撮り、アルバム作りを行っていたためではないかと思われる。

(5)アルバム所持数内訳



図

3-2 6 アルバム所持数の内訳

所持していないという回答が少ないのは「子ども」のアルバムであり、育児を行う中で写真を撮ることが多いのではないかと考えられる。次いで「夫婦」のアルバムという回答が得られたが、これは子育てと同様結婚式などの記念行事のものではないかと思われる。上位3項目のうち子どもと夫婦について特に回答数が多くなっているが、家族という項目にはこの二つが含まれる。この質問において項目の定義を明確にしなかったために、こうした結果になったのではないかとと思われる。

(6)アルバムに貼っている写真の内訳「たくさん・ある程度」のみの頻度

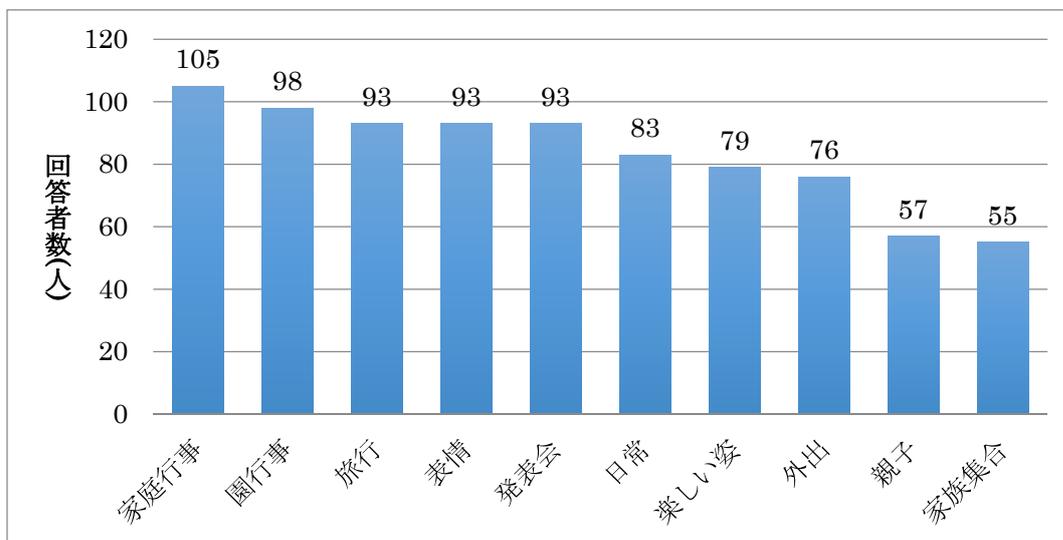


図 3-27 アルバムに貼ってある写真

回答の割合が最も多い項目は、「家庭行事」であり、最も割合が低かったのは「家族集合」であった。回答割合が半数以下であった項目は、撮影者である保護者も映る必要がある項目である。この場合写真を撮影してくれる関係者や第三者もしくはツールが必要となるために、回答数が少ないのではないかと考えられる。写真を撮ることが容易になっているのに対して、「日常」の写真という項目の回答が比較的少ないのは、撮影することと現像することがセットの行動ではないということを示唆している。

(7)育児に関する意識

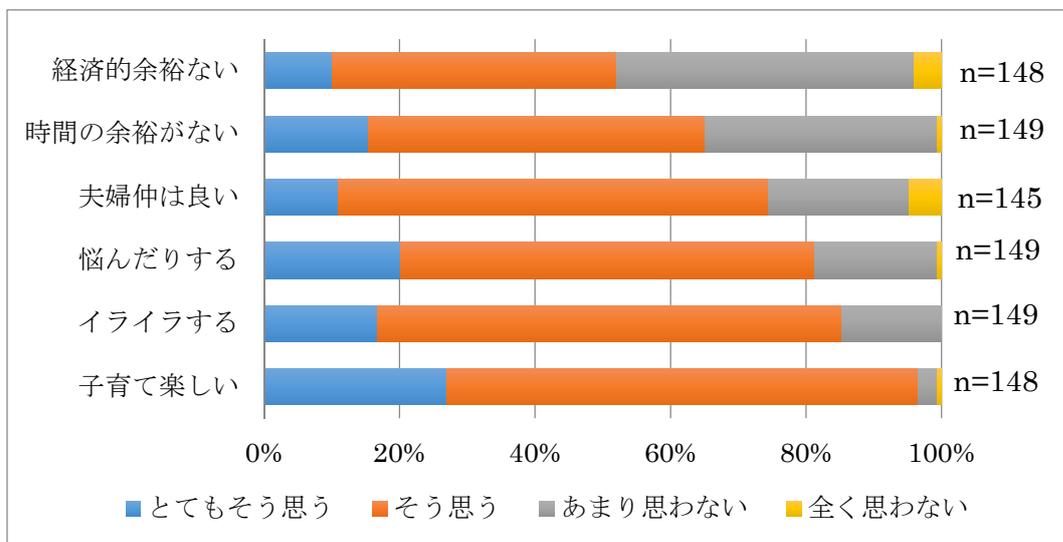


図 3-28

育児の二面性である「楽しさ」と「大変さ」のそれぞれがこの結果に表れている。全ての項目において半数以上の回答している人がおり、この二面性は常に成立するものであり、相反する感情が存在する矛盾のなかで育児が行われていることがわかる。これらの感情は、環境を含め生活や子ども、夫婦といった家族環境に影響を受けて変化する。また育児に対する思いや育児に関連した行動へ影響を与えるものと思われる。

【3】保護者調査の単純集計結果

兵庫県並びに大阪府の2都市の幼稚園,保育園,認定子ども園を利用している乳幼児を育児中の保護者に対して配布した。調査目的は,写真・アルバムとの関わりの現状と子育てへの意識,そしてこの二つの関連性についてあきらかにするためである。配布数は全800枚に対して,回収数は649枚,回収率は81.8%であった。各グラフのn数は有効回答を示している。

(1)回答者の基本属性

①回答者性別

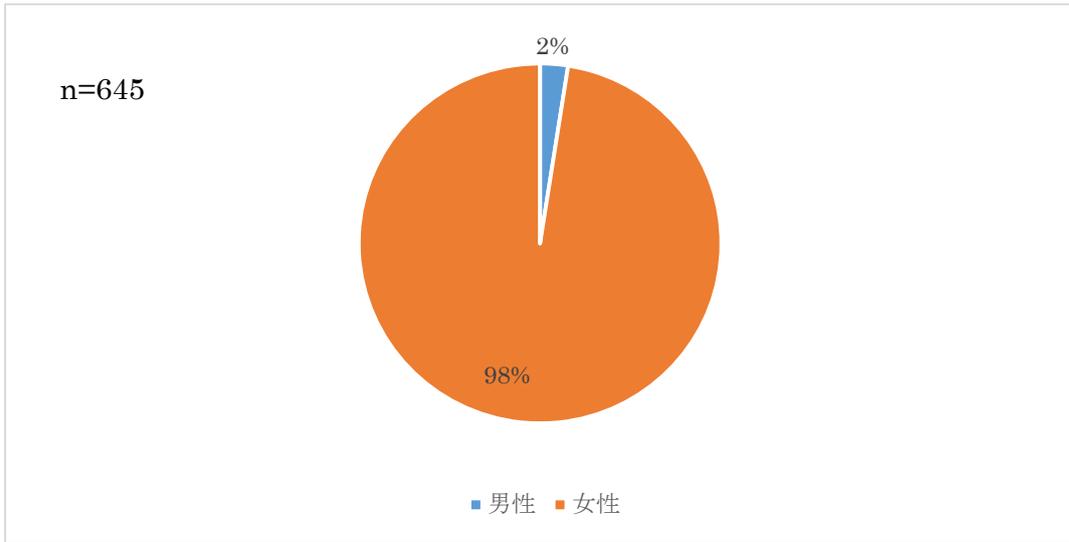


図 3-3 1 回答者性別

今回の調査においては,回答者の男女比が偏ってしまったので,各回答結果においては男女を分類せずに集約している。

②回答者の年齢

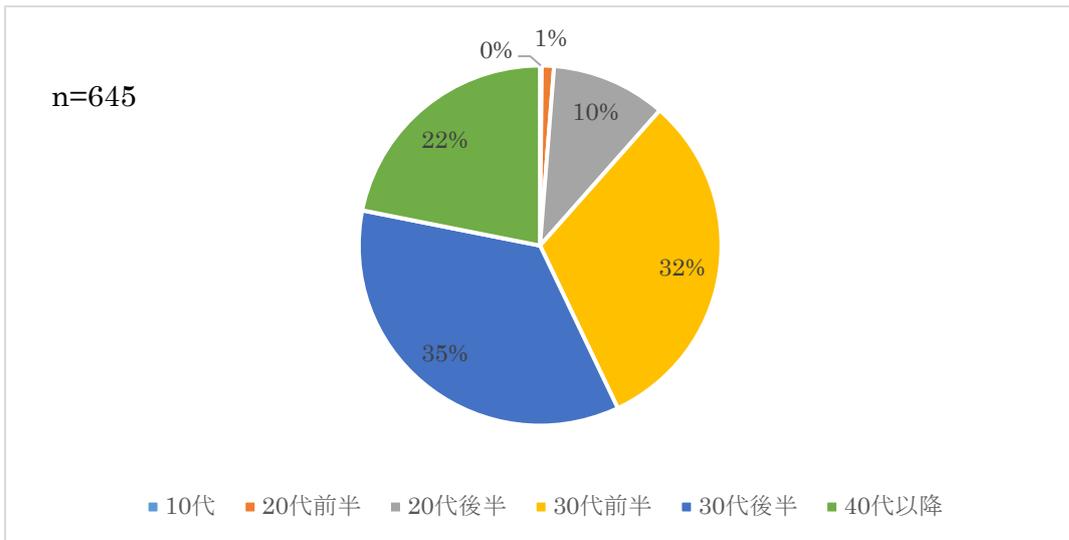


図 3-3 2 回答者の年齢

回答者の年齢層は多様であり,30代前半から40代以降という回答がほとんどを占めていた。

③結婚の有無

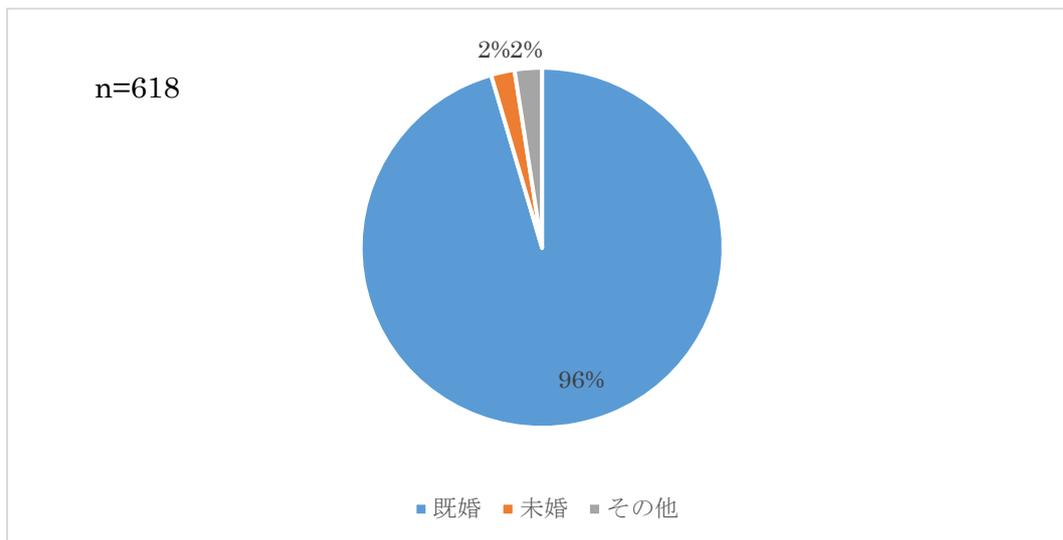


図 3-33 結婚の状況について

結婚の有無については,回答者のうち590名の保護者が既婚であると回答している一方で,未婚やその他といった回答を行っている保護者もいる。回答者数が少数であり今回は分類を行っていない。

④子どもの人数と年齢

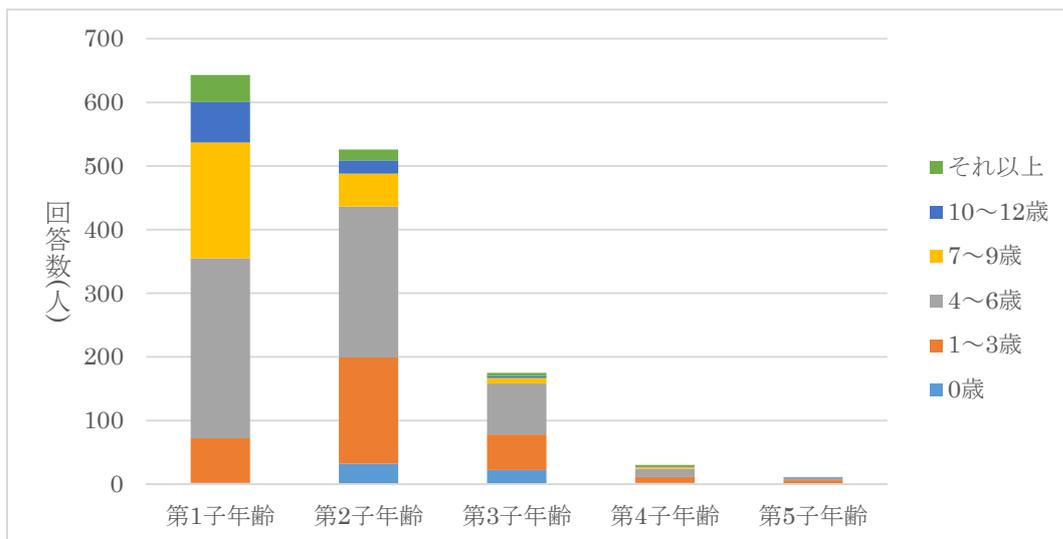


図 3-34 回答者の子どもの人数と年齢

子どもの人数の傾向としては,回答者649名中8割以上の家庭で第二子までいるという回

答が得られた。第三子からは人数が大幅に減っており,今回調査を行った地区においては,第二子までいる子育て家庭が多数あるといえる。

⑤子どもの性別

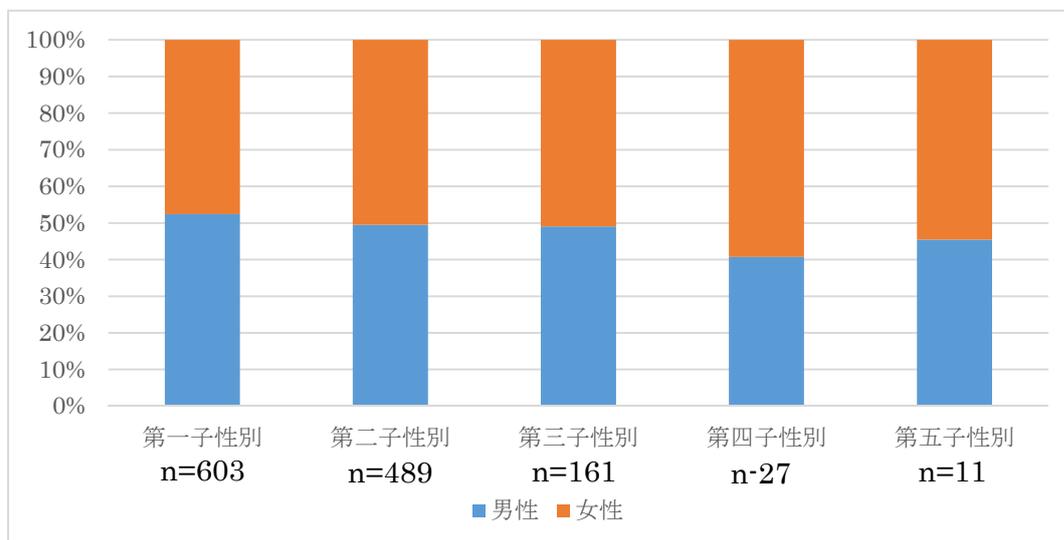


図 3-35 子どもの性別

第一子から第五子までの子どもの性別は,総数含めてほぼ同じ割合であった。

⑥就業形態について

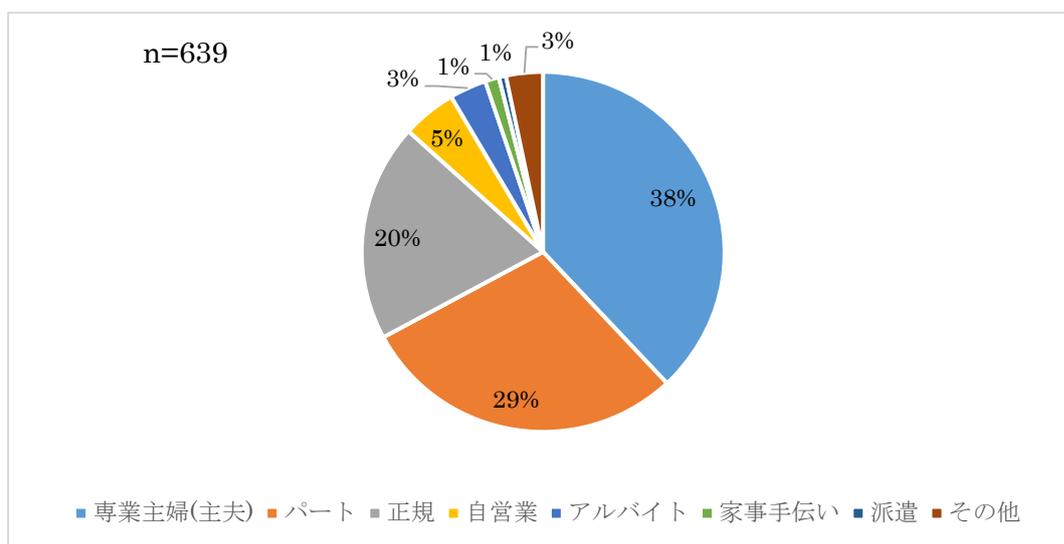


図 3-36 就業形態について

回答者の多くが女性であったためか,専業主婦並びにパートという回答が半数以上を占めており,正規雇用で就業している回答者は2割となっている。

一方で専業主婦(主夫)・家事手伝いの割合に対して,就業している回答者が多く女性の就業

率が高い傾向にあることを示している。

(2)各項目別結果一覧

⑦写真撮影の時に使用する機器について

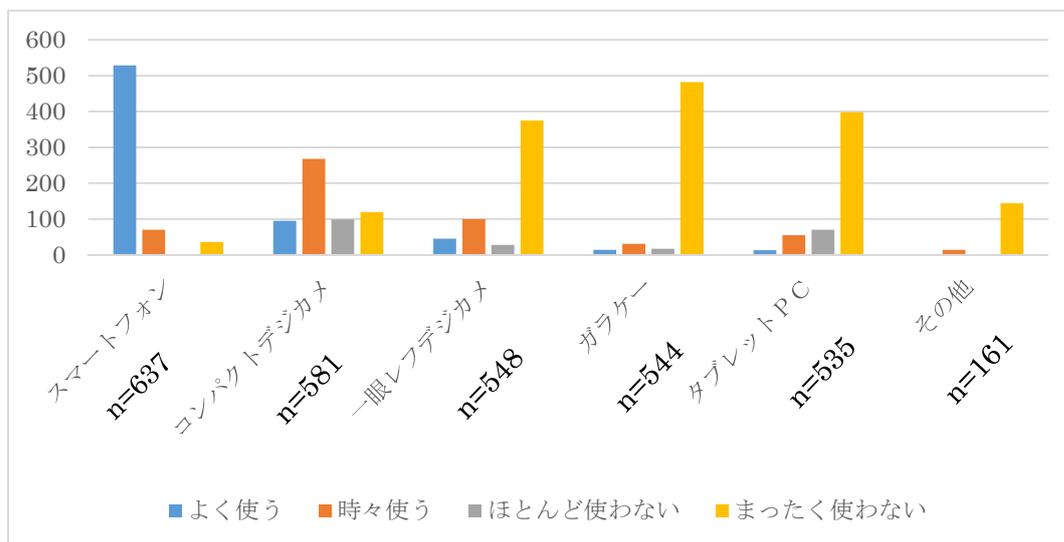


図 3-37 写真撮影に使う機器

撮影機器として利用頻度の高いものは、スマートフォンが主流となっていることが、この項目では明らかになった。本来のカメラとしての機能に主眼が置かれているデジカメや一眼レフカメラの使用頻度は、スマートフォンに比べて「よく使う」と回答した人が少なく、一眼レフカメラについては「使わない」と回答している否定群の方が割合として多くなっていった。現代の保護者がカメラという機器から離れていっていることがこの設問からいえる。

⑧機器毎の現像頻度

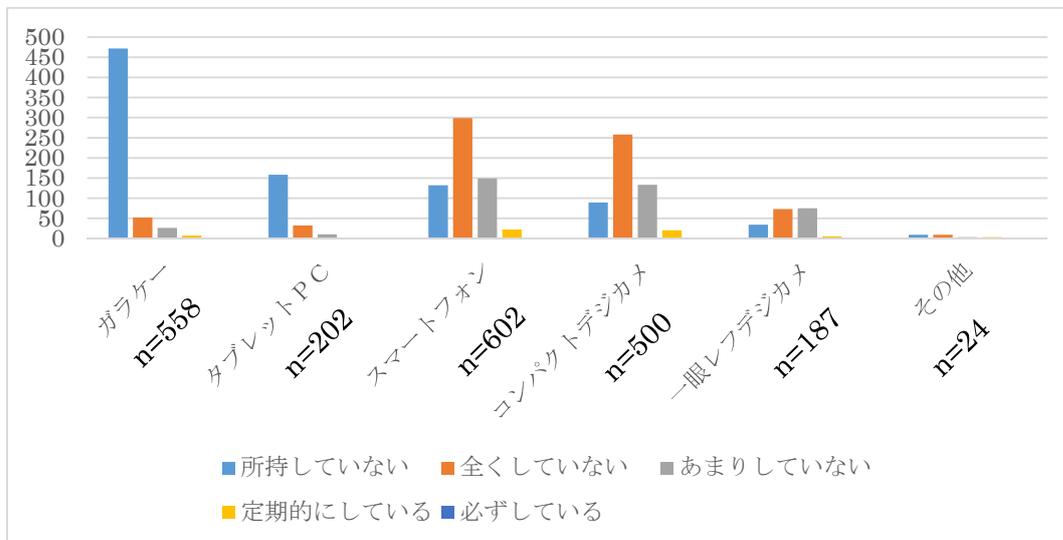


図 3-38 写真の現像頻度

全体的な傾向として、写真の現像をしていると回答している人の割合が非常に少ないことが結果からわかる。撮影における使用頻度の高いスマートフォンでさえ、半数以上の保護者が現像していないと、否定的な傾向にあり現像する機会が無くなってきているといえる。

一方で使用頻度が比較的低かったデジカメ・一眼レフデジカメの二種では、スマートフォンに比べて現像するという肯定的な回答の保護者が多かった。

⑨現像していると思うか

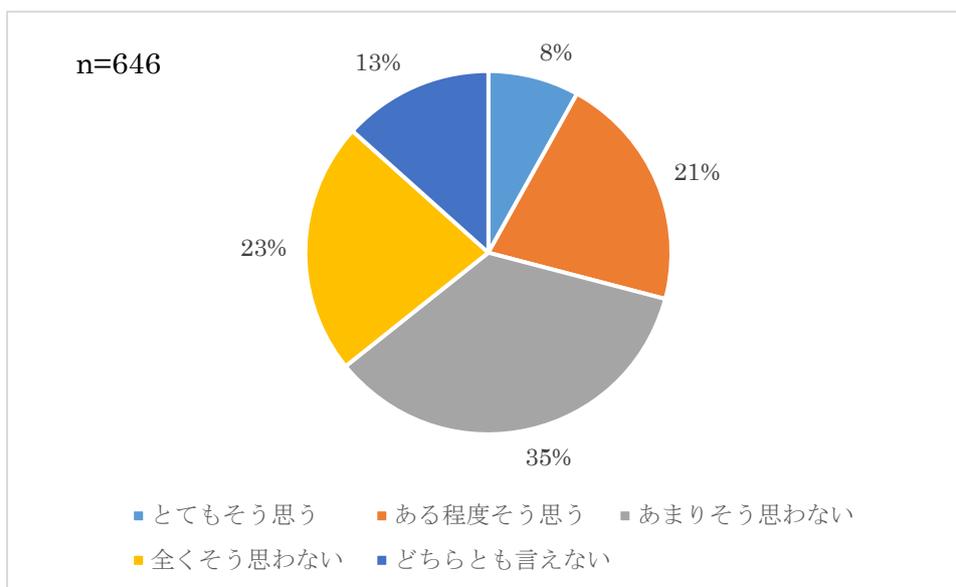


図 3-39 写真の現像頻度について

写真の現像頻度については、半数以上の保護者が自身は写真の現像を行っていないと感じ

ていると回答している。しかし、現像の頻度について肯定的な回答をしている保護者も3割近くいることから、一定数の保護者にとって写真の現像は日常的に行う行為なのではないかといえる。

⑩写真の持つ利点について

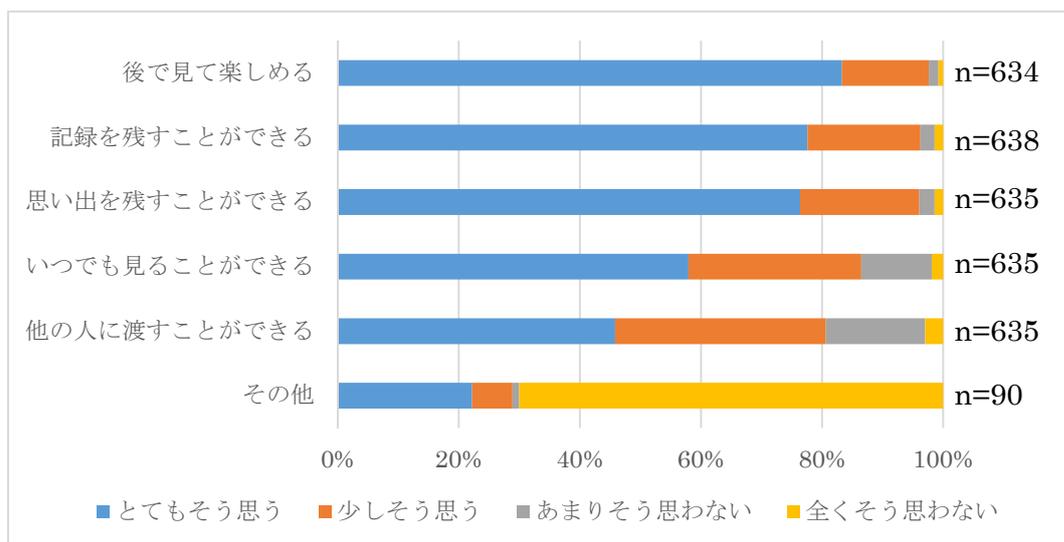


図 3-3 10 現像写真の持つ利点について

写真を現像して残すということは、アナログな紙ベースで残すことであり、そのことから予想されるメリットについて、どのように捉えているのかについて質問を行った。

結果として、その他を除いた全ての項目で、「とてもそう思う」「少しそう思う」という肯定的な回答が8割以上を占めていた。多くの人にとって、写真を現像することにはメリットが存在しているのではないかといえる。

「とてもそう思う」という、特に肯定的な回答が7割以上を占めていた上位3項目については、「後で見て楽しめる」「記録に残すことができる」「思い出を残すことができる」といった、写真に写した出来事を振り返る目的があるという共通点が見受けられる。

⑪写真の持つ短所

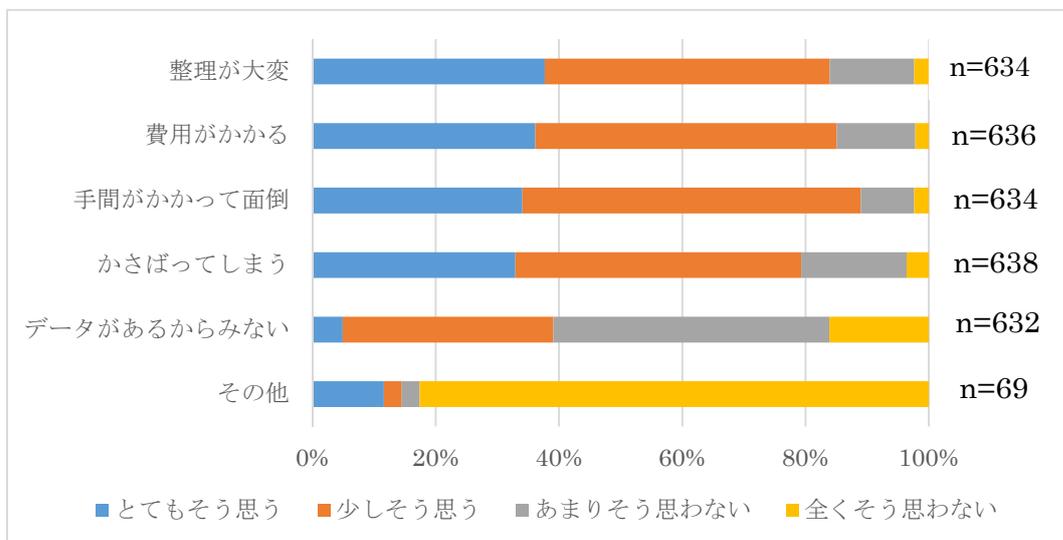


図 3-3 11 現像写真の持つ短所について

現像した写真の持つ短所として、整理の大変さや現像に掛かる費用という点に、多くの保護者の回答が得られた。撮影が手軽になった現代において、フィルムカメラのように撮影可能枚数が少なかった時代と異なり、デジタルデータを使用することでこれまでとは、比較にならない量の写真を撮影することができるようになった。これら全てを現像することは、非常に手間と費用のかかる行為となってしまう。多くの保護者がその点について、感じているということがこの設問よりいえる。

一方で、写真データの存在は、現像した写真に対してデメリットにならないということが、「データがあるから見ない」という、もっとも質問への肯定的回答者の少なかった項目からいえる。これは、写真データの存在は、同様に存在する現像された写真を見直す機会を奪うことがなく、むしろ見直すという点において現像された写真のほうが優先されるということを示している。

⑫アルバムの所持冊数

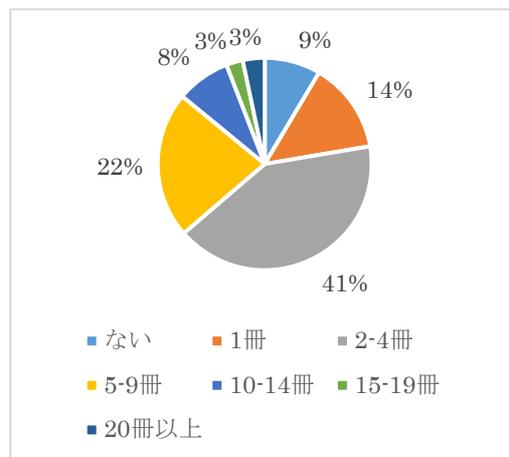


図 2-2 19 子どものアルバム所持数
n=636

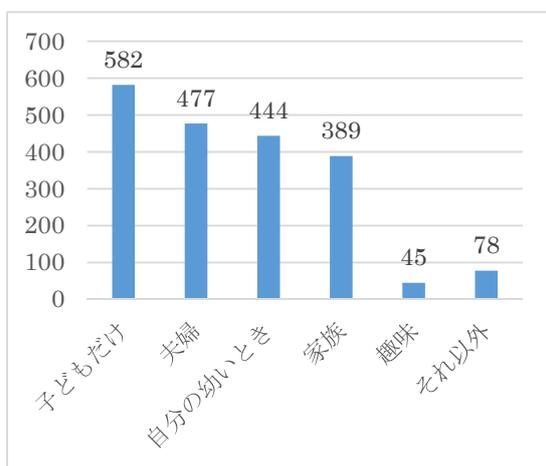


図 3-3 13 1冊以上アルバムを所持している人

アルバムの所持冊数について、その内訳ごとに質問を行った。最も所持されているアルバムは、子どもの写真のみのアルバムであった。しかし、これはあくまでも、「1冊以上アルバムを所持している」と回答している保護者の総数であり、所持冊数については、「2~4冊」と回答している保護者が最も多かった。一方で、子どものアルバムを所持していないと回答する保護者もいる。なぜ所持していないのかについては今回明らかにはしていないが、現像写真の持つ短所がこのことに関係しているのではないだろうか。

⑬アルバムに貼っている写真

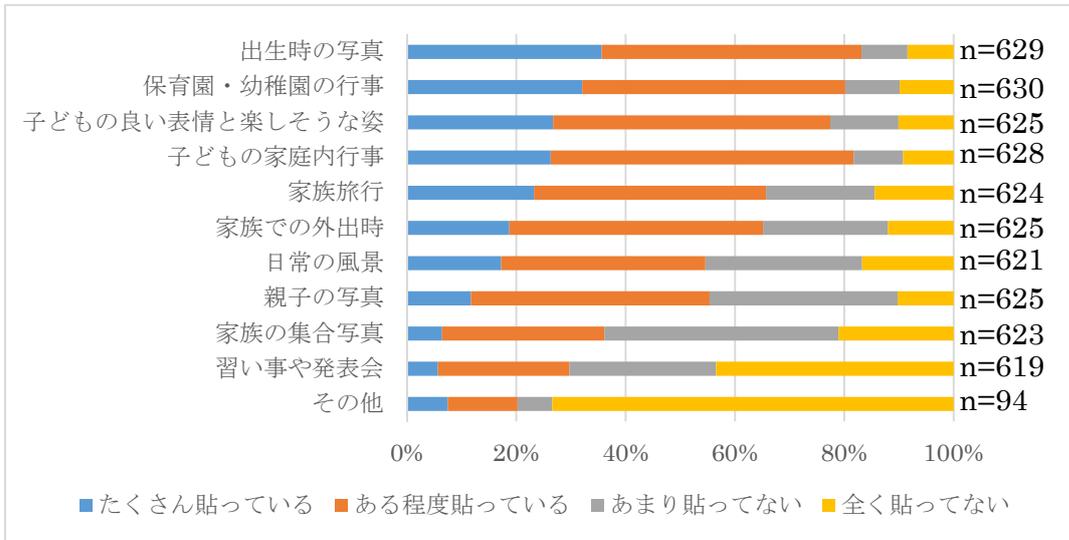


図 3-3 14 アルバムに貼っている写真の内訳

アルバムに貼っている写真の内訳を明らかにするべく、具体的にどのような状況の写真に掲載しているのかについての質問をした。

この結果特にアルバムによく貼られているのは、子ども関連のイベント・行事といったものであった。特に子育てにおける最初の大きな出来事である出生時、子どもの成長の様子を見る機会となる幼稚園・保育園行事、さらには家庭内行事や家族旅行である。これらは保護者と子ども双方にとっての思い出作りの機会となっており、写真を撮り記録することはその後の家族の思い出にとって役立つものになると考えられる。これは、写真に対して思い出の共有や記録といった役割を求めている点からいえる。

⑭写真・データを見る頻度

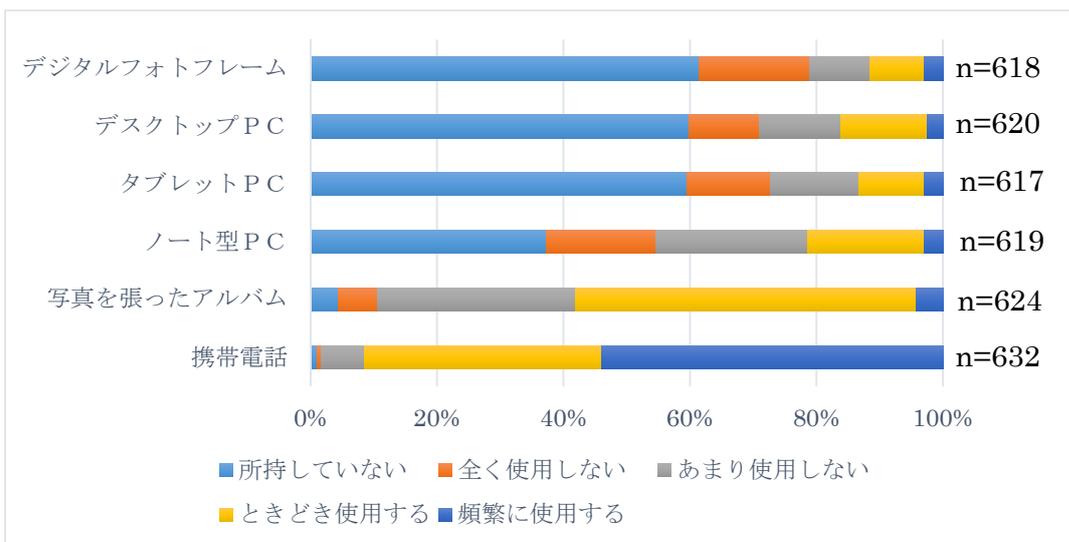


図 3-3 15 写真・データを見る頻度

現像された写真や撮影データを見直す頻度,どのような機器を使用しているのかについての質問を行った。

特に写真を見直す機会が多いのは、「携帯電話」という回答であった。「携帯電話」は日常的に使用する機器であるという点,ならびに撮影後すぐに見直すことが可能である点から,この結果になったのではないかと考えられる。これは,撮影機器としての使用頻度の点からもいえる。

アルバムを見直す機会については,多くの保護者が「ときどき使用する」と回答していることから,頻繁に見直すことはないが,意識する範囲内で見直す機会を設けているのではないだろうか。容易に使用可能であり,頻繁に写真の見直すことができる携帯電話があることによって,アルバムが全く必要なくなったというわけではなく,現代においても必要とされていることを示している。

⑮ デジタルとアナログ写真の比較

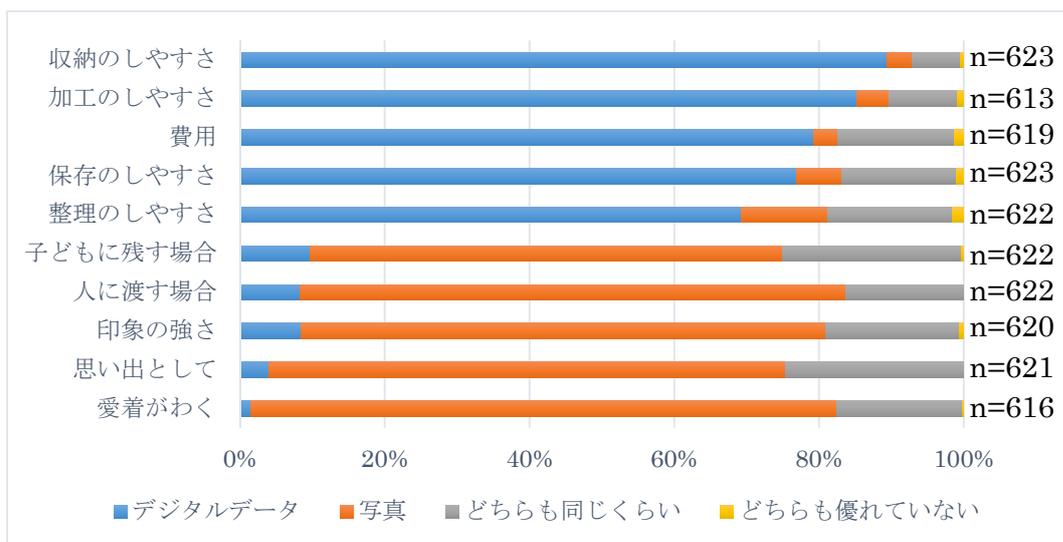


図 3-3 16 デジタル写真とアナログ写真の比較

デジタル写真とアナログ写真を直接比較した場合の結果である。

デジタル写真の場合は手間の少なさやアレンジのしやすさ,またコストの低さという点で優れていると回答している保護者が多数を占めた。これは,撮影の手軽さという点においても同様のことがいえる。これまでは写真撮影を行った場合,撮影から現像,保存までの流れに時間と費用がかかることがほとんどであった。この点で,撮影から保存までが単純になったデジタル写真は「手軽さ」という点での評価が高くなったと考えられる。

一方でアナログ写真の場合では,「手軽さ」という点での評価はあまり得られなかったが,

愛着や思い出の品としての面,ただの記録としてだけではない「感情的」な面での評価が高くなっている。ものに対して人間が愛着を持つという点から,このような結果になったのではないかと考えられる。

⑩子育てについて

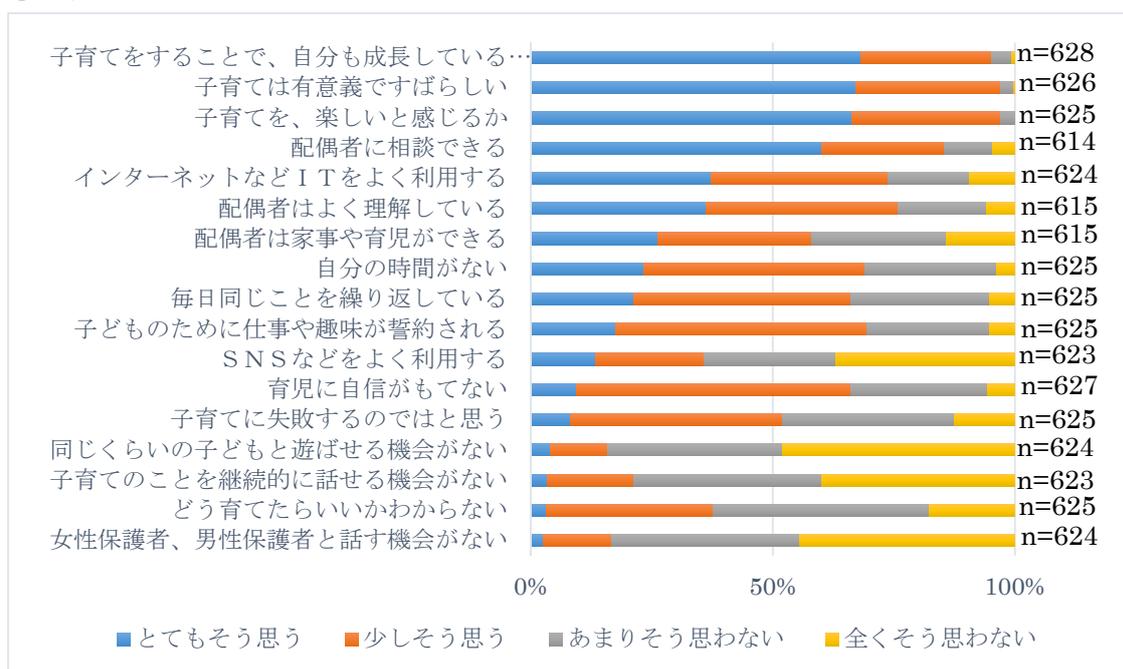


図 3-3 17 子育てへの意識

子育てについての質問では,多くの保護者が今の子育てについて肯定的な回答をしている。これは「子育てをすることで,自分も」「子育ては有意義ですばらしい」「子育てを楽しいと感じるか」といった項目の結果からいえる。

しかし,「自分の時間がない」「仕事や趣味が制約される」「育児に自身がもてない」といった項目への回答も多く,育児に対して肯定的な反面で自分たちの生活の両立や,不安とい

った要素を抱えていることもわかる。

この子育てに関する項目とこれまでの写真・アルバムについての質問項目との関係进行分析することで、子育てへの肯定的感情・子育てへの不安といった内容と写真・アルバムとの関わりがどのように影響し合っているのかについての検討を行った。

(3)単純集計の結果について

アンケートの回答結果より以下の点について指摘することができる。

①写真の撮影と現像について

多くの保護者が撮影に用いる機器として利用するものを、「スマートフォン」として回答している。撮影データのデジタル保存が可能になり、撮影に掛かる手順や時間が短縮されたことで、専門的であった撮影という行為が機器の進歩に合わせて、容易になっているといえる。カメラの持つ機能は撮影と保存が容易になったことで、写真の量も保存であり、閲覧やデータの共有という点ではスマートフォンの方が利便性の点で高く、利用の傾向も高くなっているのではないかと考えられる。結果として手軽に撮影からその後の写真の管理ができるようになったことで、写真の撮影量が増加していったのではないかと考えられる。写真の量が増えたことで、現像をした場合の整理の手間が大きくなった。そのために、写真の現像を行う人の割合が低下しているのではないだろうか。

②アルバムの所持率と写真への意識

写真を現像する人の割合は低下している一方で、「アルバムを所持していない」と回答している人の割合は少数であり、特に「子どものアルバム」を所持していると回答した保護者は多数いた。また、所持冊数は2～4冊程度としている保護者が最も多く、第一子である乳幼児を育児中の保護者が多いことから、子育ての中で写真撮影を行っていく場合、今後のその冊数は増えていくのではないだろうか。

また、デジタル化が進む中でアナログなアルバムの所持率が高いのは、多くの保護者がアナログ写真に対して心情面でのメリットを感じているためではないだろうか。

しかし、心情面でのメリットを多くの保護者が感じているとしても、現代では写真の利便性の点が優勢されているためか、写真の現像が行われていないことが、写真・アルバムとの関りの現状から明らかである。

【4】 学生調査の単純集計結果

現代の学生と写真・アルバムの関わりの実態を明らかにし、現在の学生の自己形成に対して影響を与えているのか、またどのような影響を与えているのかを明らかにするために行った。配布数は全 500 枚に対して、回収数は 354 枚、回収率は約 71%であった。配布時期は 2017 年 1 月である。

(1) 回答者の基本属性

① 回答者性別

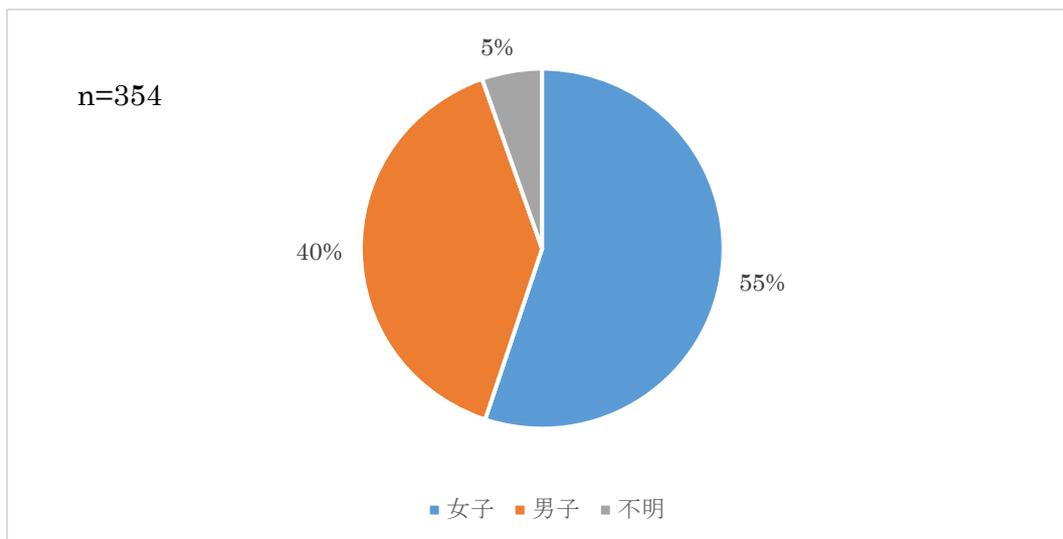


図 3-4 1 回答者の性別

学生の回答者は女子学生の割合の方が、男子学生より高くなっている。

②回答者の学年内訳

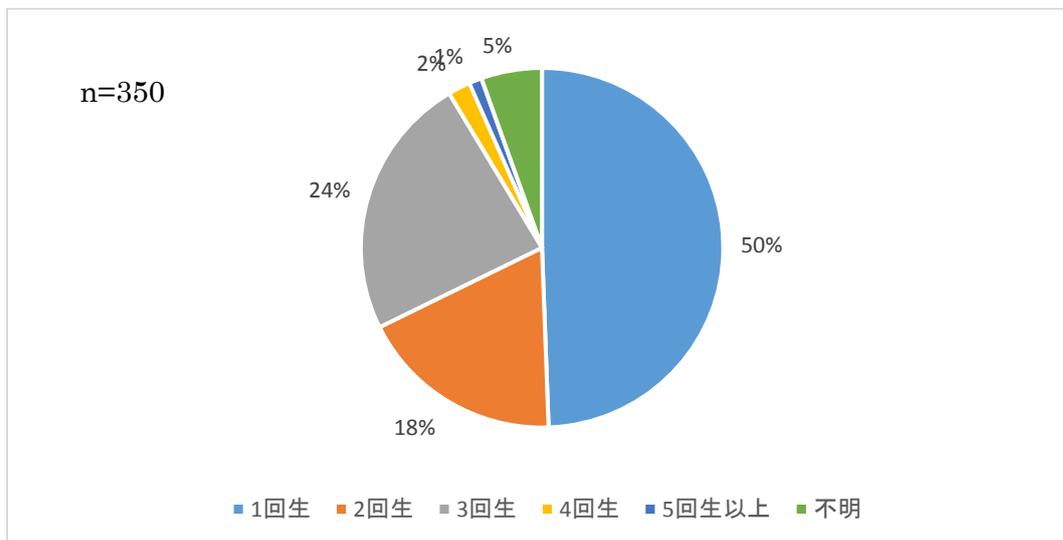


図 3-4 2 回答者の学年

回答者の半数近くは1年生であり,また2~3年生の学生も多いことから,年齢性は18歳から20歳前後であると考えられる.

③回答者の兄弟(姉妹)の人数

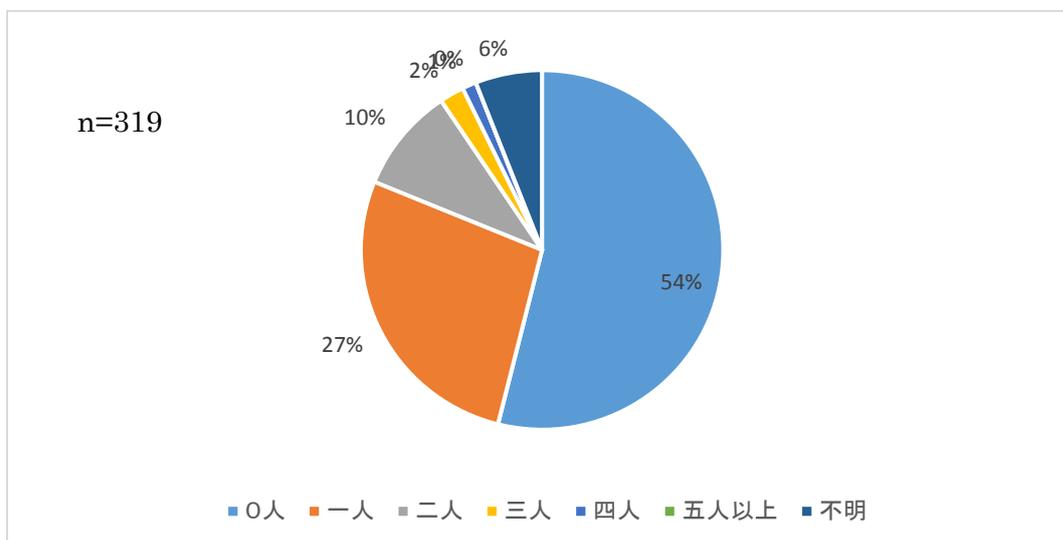


図 3-4 3 回答者の兄弟構成

ほとんどの学生が兄弟(姉妹)のいない一人っ子であった。兄弟(姉妹)がいると回答した学生も多くは2人兄弟(姉妹)と回答している。3人以上の兄弟(姉妹)のいると回答している学生は少数である。

④兄弟の何番目であるか

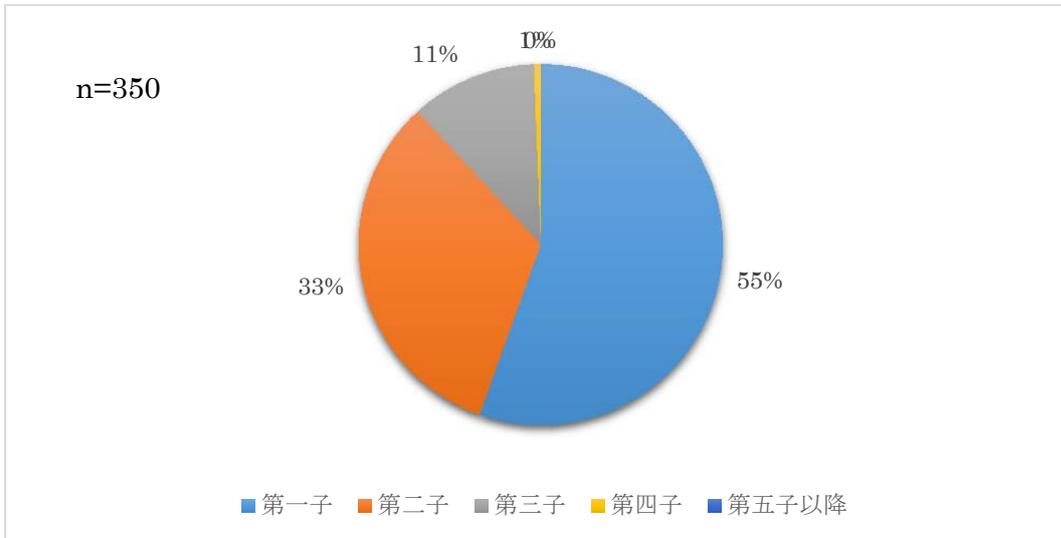


図 3-4 4 兄弟のうち何番目か

兄弟(姉妹)の回答結果からもわかるように,第一子と回答している学生が半数以上を占めている. またこの二つの結果より,兄弟(姉妹)がいると回答した学生のほとんどは,年上の兄弟(姉妹)がいるということになる.

(2)各項目別結果一覧

⑤写真を見る機器と頻度

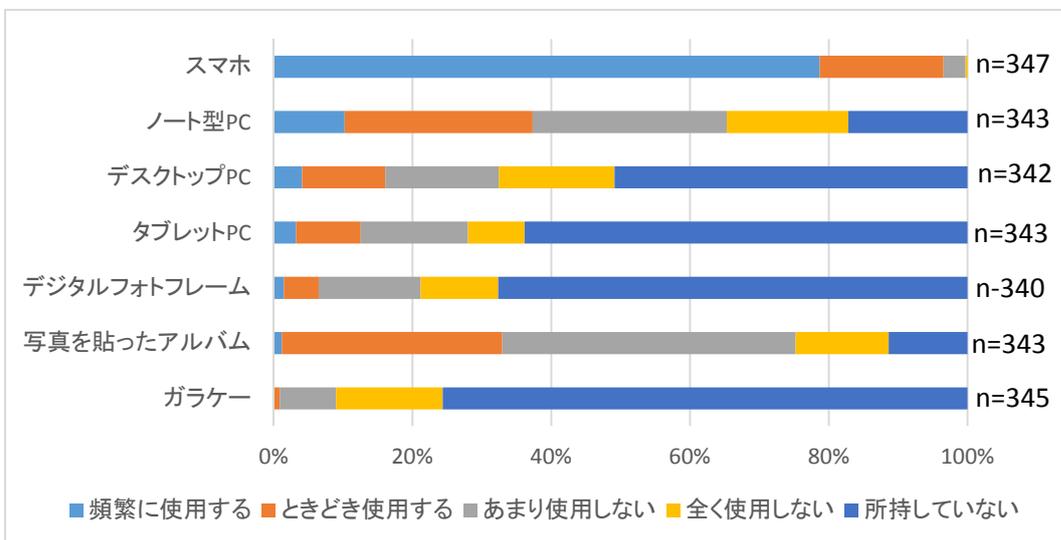


図 3-4 5 写真を見る機器と頻度

写真を見るために使用する機器として,最も「頻繁に使用する」という回答が多かったのは,「スマホ」という回答であった. 解答の割合で言えば,スマホを利用して写真を見る機会が,ほとんどの学生にあるといえる.

その他には,「ノート型PC」「写真を貼ったアルバム」について「ときどき使用する」と

いう回答の割合が高くなっており、学生にとってこの二つは利用する傾向があるといえる。その他の項目では、軒並み「使用する」という肯定群の回答割合が低くなっている。

⑥撮影に使う機器

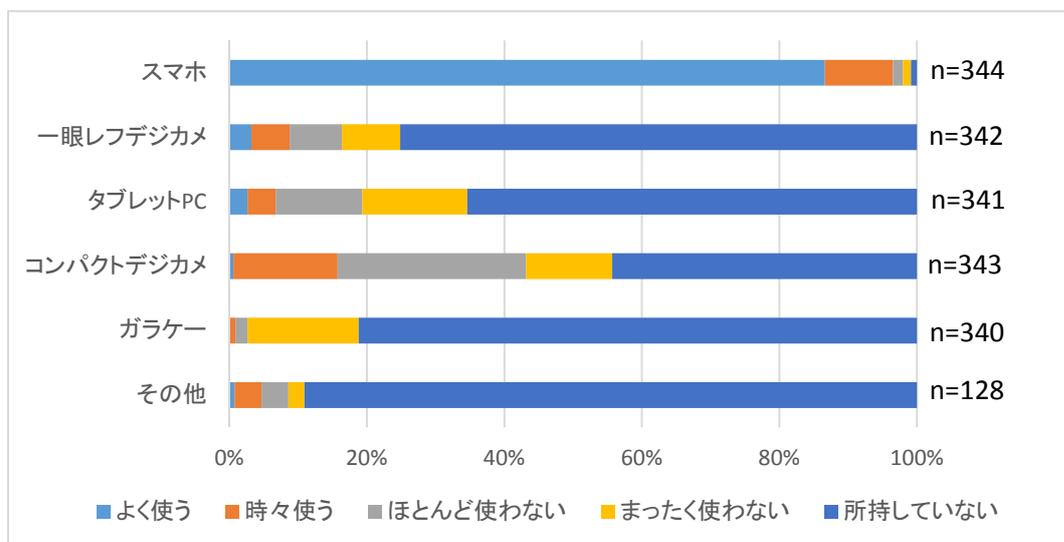


図 3-4 6 撮影に使う機器

撮影に使用する機器は、「スマホ」という回答が最も多く、「よく使う」「時々使う」といった肯定群の割合が 90%を越えており、多くの大学生にとって写真を撮るときにスマホを利用することは、一般的であるといえる。

肯定群の割合で見ると、「スマホ」の次点には「コンパクトデジカメ」という回答が選ばれている。これは両者に持ち運びや撮影における手軽さという要素が共通しているからなのではないだろうか。

⑦機器毎の写真現像の頻度

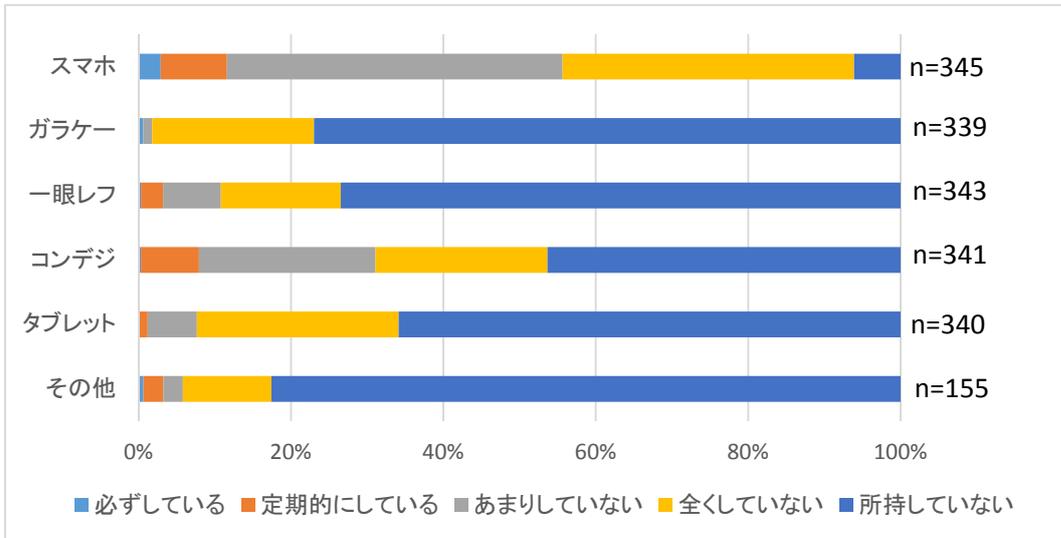


図 3-4 7 機器ごとの写真現像の頻度

写真の現像については、全体的に現像をしていない否定群の回答が全項目を通じて多くなっている。これは、大学生にとって現像するという行為が一般的ではないということを示しているといえる。

比較的肯定群の多い項目をみると、「スマホ」「コンパクトデジカメ」という回答が挙げられるが、これは撮影に使用する機器と同様の結果である。つまり、そもそもの利用率の低さがこの機器ごとの撮影頻度に影響しているのである。

また撮影頻度が特に高かったスマホにおいても、現像頻度は高いとは言えず学生にとって写真を撮ること自体が目的であり、現像することはそれとは区別されるのであろう。

⑧写真の現像をしていると思うか

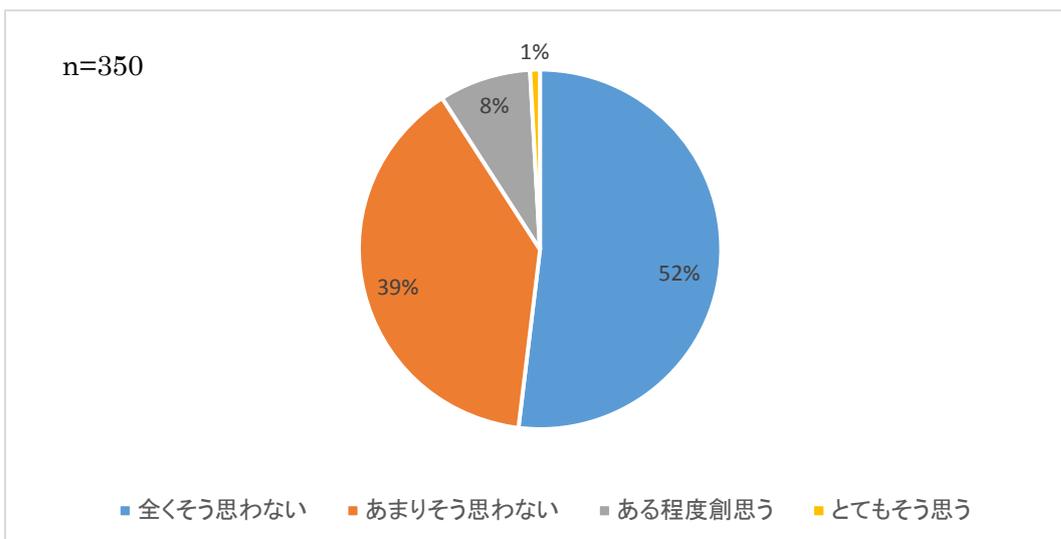


図 3-4 8 写真の現像意識

現像頻度の自覚についても,学生の回答の大半は否定的であり,実際の現像頻度も低い割合であったことから,学生の現像頻度の低さは自覚を伴うものであることがわかる.

⑨現像の頻度

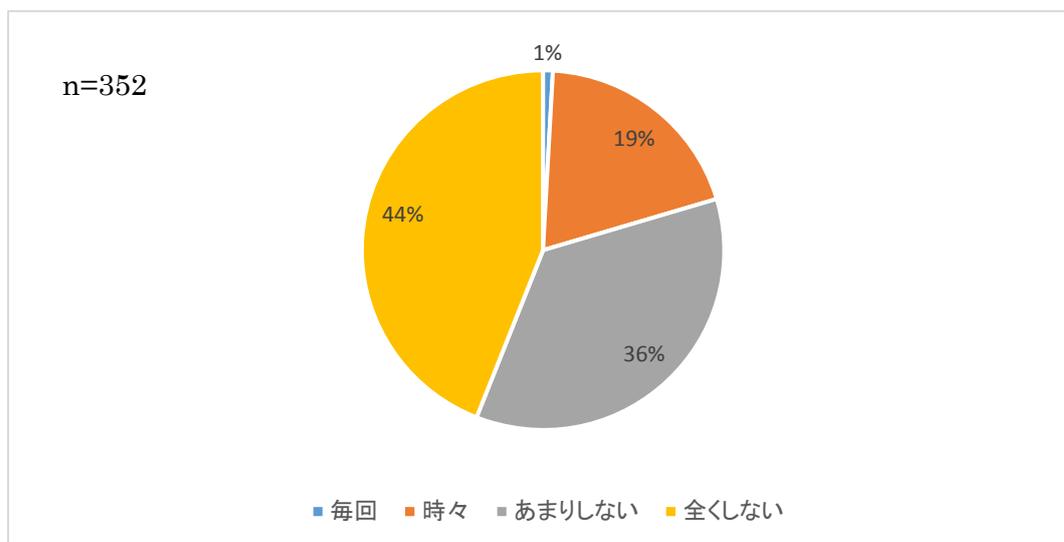


図 3-49 現像の頻度

機器ごとではなく,現像そのものを行っているかどうかについては,2割の学生が「毎回している」「時々している」といった肯定的な回答をしていた. 機器ごとで質問した場合多くとも肯定的な回答は1割前後であり,現像頻度の自覚については1割以下であったが,一定数の学生は撮影機器を問わない場合,現像を行う学生がいることがわかる.

⑩アルバムの作成をしているか

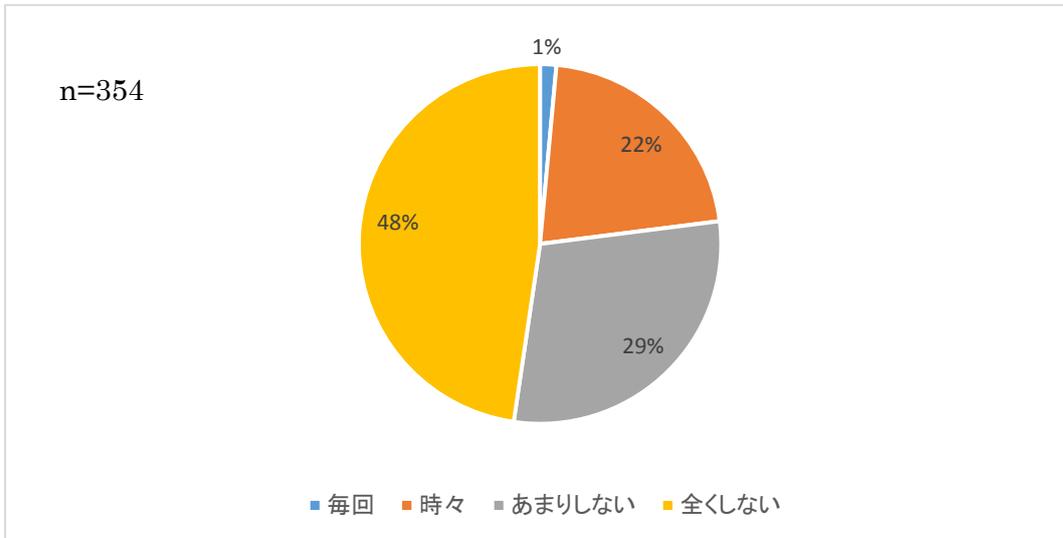


図 3-4 10 アルバム作りを行っているか

学生の多くがアルバム作りをあまり積極的に行っていないことが、この結果よりわかる。一方で、定期的ではないがアルバム作りを行っている学生もいることから、写真の現像とアルバム作りは現代の学生の間でも行われている活動であるといえる。

⑪写真との関わりについて

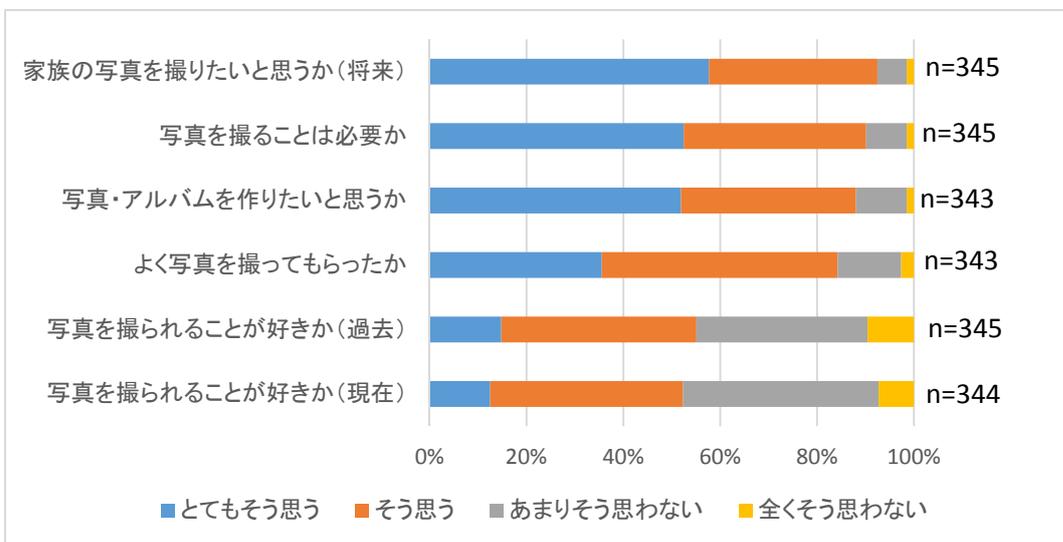


図 3-4 11 写真と関わることについて

全項目において、「とてもそう思う」「そう思う」という肯定回答が半数以上を占めており、写真に対して学生は肯定的なイメージを擁しているのではないだろうか。

「とてもそう思う」という回答が半数以上を占めている上位 3 項目については、将来の写真との関わりについての質問であり、大半の学生は将来の家族との関わりなどにおいて、写真・アルバムを利用したいと考えているといえる。

⑫アナログとデジタル写真の違いについて

アナログとデジタルの写真ごとの効果の差について質問した項目である。

表 3-4 1 デジタルとアナログのどちらが成長記録を残す効果が強いのか

	とても そう思う		そう思う		あまり そう思わない		全く そう思わない	
成長記録を残す(デジタル)	111	33%	158	1%	61	18%	5	1%
成長記録を残す(アナログ)	200	59%	122	1%	14	4%	3	1%

表 3-4 2 デジタルとアナログのどちらが思い出を残す効果が強いのか

	とても そう思う		そう思う		あまり そう思わない		全く そう思わない	
思い出を残す(デジタル)	137	41%	156	1%	34	10%	5	2%
思い出を残す(アナログ)	219	66%	105	1%	9	3%	1	0%

表 3-4 3 デジタルとアナログのどちらが後日楽しむという効果が強いのか

	とても そう思う		そう思う		あまり そう思わない		全く そう思わない	
後日楽しむことができる(デジタル)	153	46%	146	1%	28	8%	4	1%
後日楽しむことができる(アナログ)	210	63%	105	1%	18	5%	3	1%

表 3-4 4 デジタルとアナログのどちらが他の人に渡すことに優れているか

	とても そう思う	そう思う	あまり そう思わない	全く そう思わない
他の人に渡すことができる(デジタル)	129 39%	134 1%	54 16%	16 5%
他の人に渡すことができる(アナログ)	119 35%	130 0%	74 22%	13 4%

表 3-4 5 デジタルとアナログのどちらがいつでも見ることが出来る点で優れているか

	とても そう思う	そう思う	あまり そう思わない	全く そう思わない
いつでも見ることが出来る(デジタル)	203 61%	111 1%	17 5%	3 1%
いつでも見ることが出来る(アナログ)	58 17%	96 1%	162 49%	16 5%

「成長記録を残す」「思い出を残す」「後日楽しむことが出来る」といった心情面に影響を与える点では、デジタルに比べアナログの方が「とてもそう思う」という回答が多いため、優位な傾向にある。一方でデジタルにおいては、「いつでも見ることが出来る」という項目において、アナログに比べて大きく優位になっており、デジタルの持つ手軽さという利点を表しているものと考えられる。

他の人に渡すことが出来るという点では、デジタル・アナログの間に大きな差はみられない。

⑬アルバムの所持数

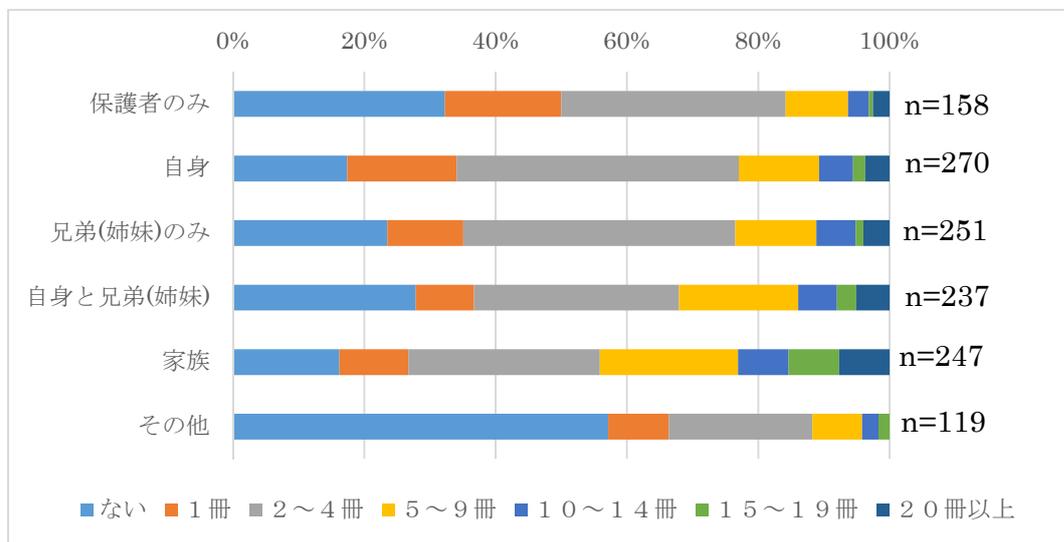


図 3-4 12 アルバムの所持数

アルバムの所持冊数として、最も多い回答は「2~4冊」というものであった。また、それ以上の冊数を所持していると回答している学生もいることから、多くの学生の家庭には何らかの内容のアルバムが存在しているといえる。

「ない」と回答している学生も各項目に一定数いるが、全体の結果として写真のデジタル

化が進んでいる現代においても,アナログな写真アルバムの存在は広く認知されているといえる.

⑭ デジタルとアナログの差

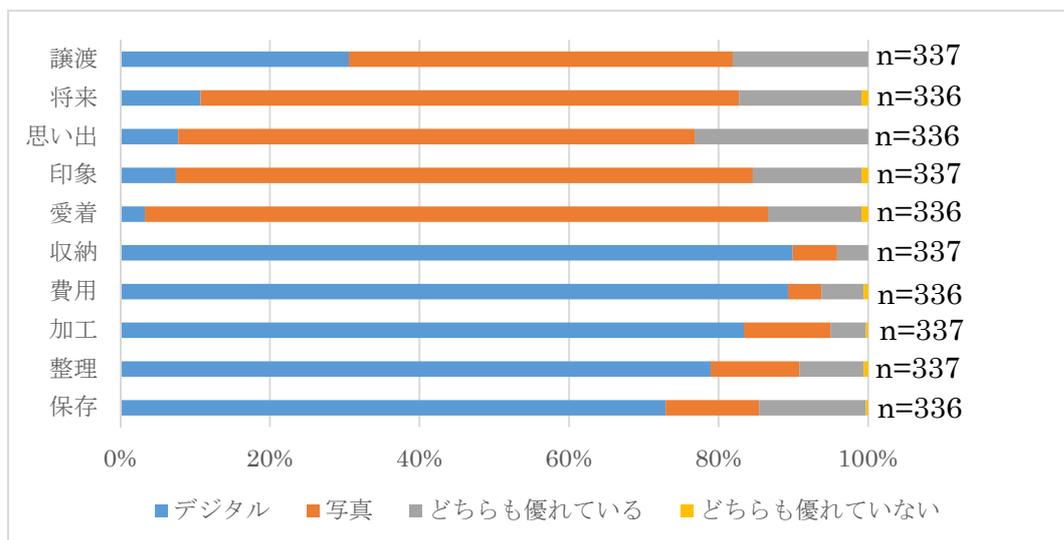


図 3-4 13 用途別・利点別のデジタルとアナログ写真の比較

各用途・利点別にアナログとデジタルのどちらが優れているのかの質問を行った・質問⑫と同じように「愛着」「将来」「譲渡」「思い出」「印象」といった心情面に対して影響を与える項目については,アナログの方が優位である.

デジタルについては「加工」「費用」「収納」「整理」「保存」といった心情面でなく,モノとしての利便性や手軽さの点において優位である.

よってこれらの質問項目より,手軽さや利便性を持つデジタル写真が普及していく一方で,心情面への影響の大きさについてはアナログの写真の方が優位なために,現代においてもアナログ写真の需要が発生しているのではないだろうかという点である.

⑮ 家族について

学生を持つ家族への感情また,家族との関係性についての質問を行った. 回答結果の集計結果を以下に記載する.

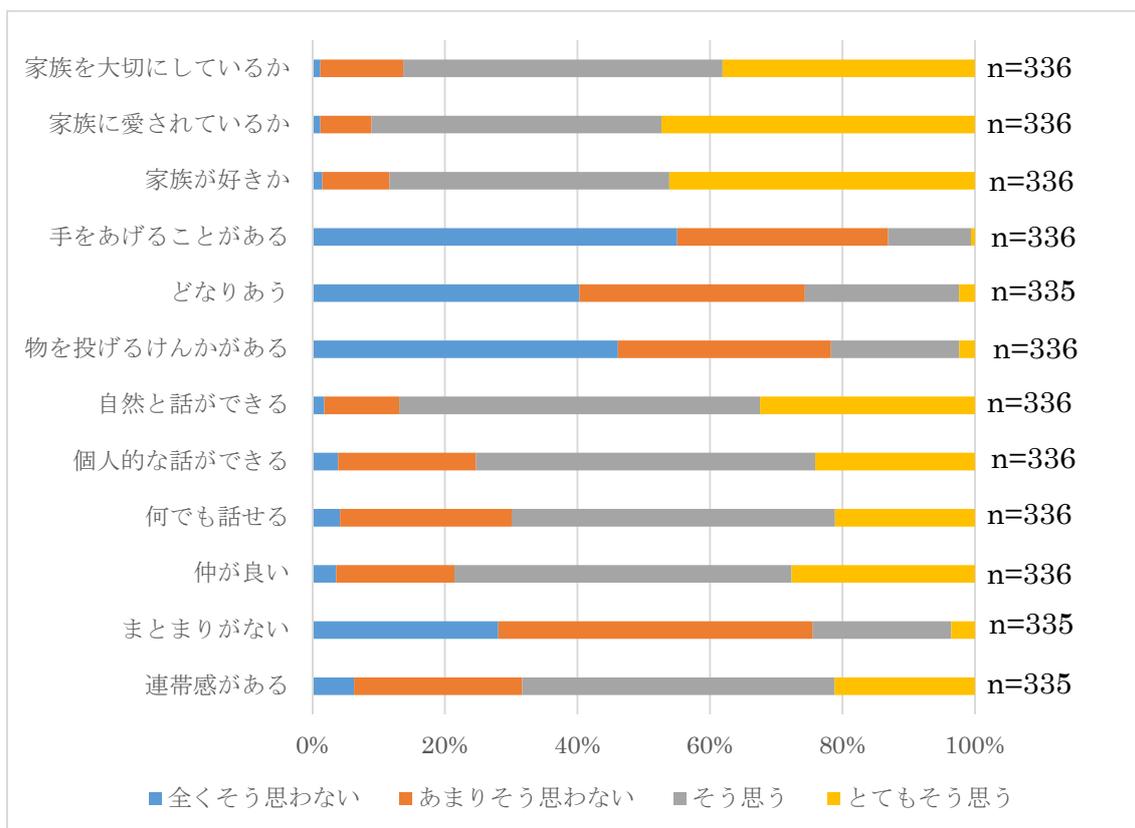


図 3-4 14 家族感について

家族についての質問を因子ごとに分類したものを以下に記載する。

表 3-4 6 親密性

	連帯感がある		まとまりがない		仲が良い	
全くそう思わない	21	6%	94	28%	12	4%
あまりそう思わない	85	25%	159	47%	60	18%
そう思う	158	47%	70	21%	171	51%
とてもそう思う	71	21%	12	4%	93	28%

家族への親密性については多くの学生が、良い傾向であるという結果が得られている。7割以上の学生は家族との仲が良好であり、家族としてのまとまりがあるといえる。

一方で2割近くの学生は、家族との親密性が高くないと回答している。

表 3-47 家族間コミュニケーション

	何でも話せる		個人的な話ができる		自然と話ができる	
全くそう思わない	14	4%	13	4%	6	2%
あまりそう思わない	87	26%	70	21%	38	11%
そう思う	164	49%	172	51%	183	54%
とてもそう思う	71	21%	81	24%	109	32%

親密性と類似した傾向が得られており、7割近くの学生は家族間でのコミュニケーションを行うことが日常的であり、自然と会話を行っているものと考えられる。これは、家族関係の親密さによるものではないかといえる。

表 3-48 家族不和

	物を投げる けんかがある		どなりあう		手をあげる ことがある	
全くそう思わない	155	46%	135	40%	185	55%
あまりそう思わない	108	32%	114	34%	107	32%
そう思う	65	19%	78	23%	42	13%
とてもそう思う	8	2%	8	2%	2	1%

家族不和を抱えていると回答している学生の割合は、親密性・コミュニケーション不和を抱える学生と同程度の割合で存在している。親密性の低さは関係性が希薄というわけではなく、仲が良くないという意味合いが強いのではないだろうか。

表 3-49 家族愛

	家族が好きか		家族に愛されているか		家族を大切にしているか	
全くそう思わない	5	1%	4	1%	4	1%
あまりそう思わない	34	10%	26	8%	42	13%
そう思う	142	42%	147	44%	162	48%
とてもそう思う	155	46%	159	47%	128	38%

家族愛の傾向については9割近くの学生自身が向ける家族への愛情、自身に向けられる家族の愛情について肯定的に捉えているといえる。家族との不和を感じる学生が2割近くいる中、その半数は家族に対しての愛情を持っているのだろうか。

⑩自身について

学生自身ことについての質問を行いそれぞれ回答してもらった。また全体の集計結果の後に、因子ごとに集計したものを記載する。

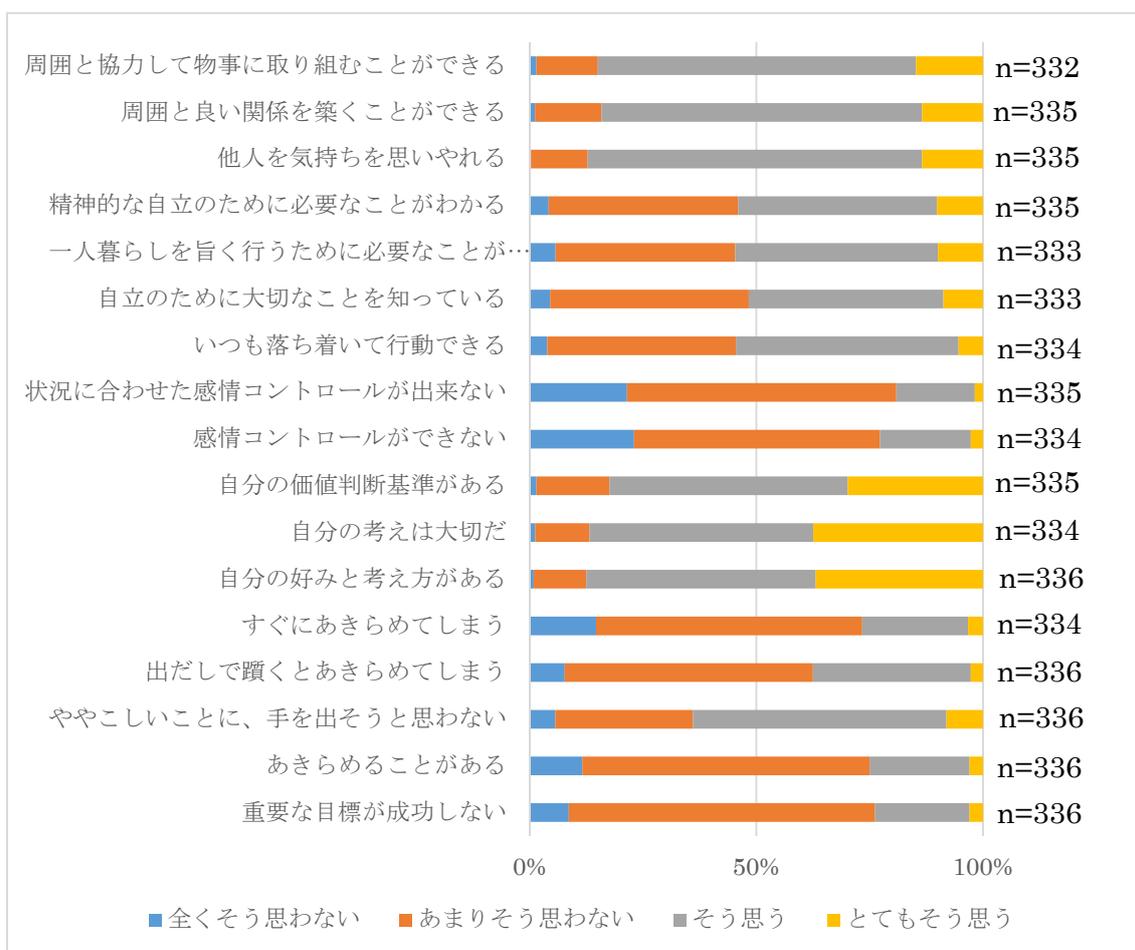


図 3-4 15 学生の自己効力感について

表 3-4 10 学生の持続力

	重要な目標が成功しない		あきらめることがある		ややこしいことに、手を出そうと思わない		出だしで躓くとあきらめてしまう		すぐにあきらめてしまう	
	人数	割合	人数	割合	人数	割合	人数	割合	人数	割合
全くそう思わない	29	9%	39	12%	19	6%	26	8%	49	15%
あまりそう思わない	227	68%	213	63%	102	30%	184	55%	196	59%
そう思う	70	21%	74	22%	188	56%	117	35%	78	23%
とてもそう思う	10	3%	10	3%	27	8%	9	3%	11	3%

課題へ取り組む持続力は学生の多くは、持っているのではないだろうか。これは、「取り組みをあきらめる」という回答が全般に少ない点並びに「成功しない」という回答が少なく達成率が高いという点から分かる。しかし、「ややこしいことに手を出そうと思わない」という回答が多いことから、あくまでも達成可能なことがある程度予測できる課題や、手間の少ないことに対してのみ積極的になっているのではないかと考えられる。

表 3-4 11 学生の自己同一性

	自分の好みと 考え方が ある		自分の考えは 大切だ		自分の価値判断 基準がある	
	人数	割合	人数	割合	人数	割合
全くそう思わない	3	1%	4	1%	5	1%
あまりそう思わない	39	12%	40	12%	54	16%
そう思う	170	51%	165	49%	176	53%
とてもそう思う	124	37%	125	37%	100	30%

回答全体の傾向として自己同一性が高く、思考判断の基礎として自分の考えをしっかりと持っている学生が多く、また自身の考えを持つことの大切さも感じているようである。

表 3-4 12 学生の感情統制

	感情コントロール ができない		状況に合わせた 感情コントロール が出来ない		いつも落ち着い て行動できる	
	人数	割合	人数	割合	人数	割合
全くそう思わない	77	23%	72	21%	13	4%
あまりそう思わない	181	54%	199	59%	139	42%
そう思う	67	20%	58	17%	164	49%
とてもそう思う	9	3%	6	2%	18	5%

感情統制については、意見が別れた項目がある。喜怒哀楽といった感情のコントロールを行うことは、学生にとって容易なことであり、出来ないという回答は2割となっている。多くの学生は精神的な安定期に入っていると考えられる。

しかし、落ち着いた行動ができるかという項目では、「あまりそう思わない」という回答が他2つに比べて増加している。学生にとって感情コントロール以上に、平常心を保つことの方が困難なのだろうか。

表 3-4 13 学生の自立性

	自立のために大 切なことを知っ ている		一人暮らしを旨く 行うために必要 なことがわかる		精神的な自立の ために必要なこ とがわかる	
	人数	割合	人数	割合	人数	割合
全くそう思わない	15	5%	19	6%	14	4%
あまりそう思わない	146	44%	132	40%	140	42%
そう思う	143	43%	149	45%	147	44%
とてもそう思う	29	9%	33	10%	34	10%

自立性についての項目では、回答が3項目全てにおいて肯定群・否定群でほぼ半数ずつに分かれている。学生にとって、「一人暮らし・精神的な自立」に必要なことについて、はっきりと分かっているとはいえないようである。

また回答が分かれた理由として、生活形態の違いもあるのではないだろうか。一人暮らしの学生と実家暮らしの学生では回答結果に差が出るのではないかと、考えられる。

表 3-4 14 学生の協調性

	他人を気持ちを 思いやれる		周囲と良い関係 を築くことができ る		周囲と協力して 物事に取り組む ことができる	
	人数	割合	人数	割合	人数	割合
全くそう思わない	1	0%	4	1%	5	2%
あまりそう思わない	42	13%	49	15%	45	14%
そう思う	247	74%	237	71%	233	70%
とてもそう思う	45	13%	45	13%	49	15%

学生の協調性は全体の傾向として高く、集団行動の点において学生は問題なく活動できていると考えられる。

周囲への気遣いを行う点にも肯定的な回答が多く、人間関係を良好にする上での思いやりや優しさという点でも成熟している学生が多いといえる。

(2)まとめ

学生のアンケート単純集計結果についてまとめを以下に記述していく。

①学生の写真・アルバムとの関わりの現状

学生が写真撮影において利用しているのは、「スマートフォン」を利用している学生が最も多かった。これは保護者の利用率と傾向としては類似しており、写真の閲覧に利用する機器としても「スマートフォン」と回答している学生が多い。また「利用する」という肯定群の割合としては、アナログなアルバムの利用が一定数存在していることを示している。

一方で写真の現像を行っている学生は割合として少数であり、且つアルバム作成を行っている学生の割合も非常に少数である。アルバム利用率のとの差から、自身のこれまでの写真を見直す機会があるのであって、改めて現在の自身の写真をアルバムにして見直す機会はないのではないだろうか。

デジタル・アナログ写真への意識として、アナログの写真について心情面での優位性が見られるものの、手軽さ・利便性の点については、デジタルの優位性が見られた。これは保護者に対しての調査でも同様の傾向が見られたことから、両世代共通の認識であると考えられる。

現像された写真の優位性の認知が学生の間にもある中で、写真の現像率が低いのは、現代の学生にとって写真撮影に用いる機器はスマートフォンが一般的であり、周囲の人間と写真の共有を行う際も、スマートフォンを用いることで可能になったためではないだろうか。現像する手間もなく、これまでの写真のように閲覧することができるようになったこと、写真を共有することも同じように手軽にできるようになったからではないだろうか。

【5】アンケート分析

(1)予備調査：家族関係・育児について

設問 10「育児について」に関して因子分析を行い、育児に対する状態の把握を行った。この結果、因子負荷量 0.3 を基準として 3 因子 6 項目が抽出された。抽出された因子はそれ

それ、F 1 : 「育児にイライラすることがある」「育児に悩んだりすることがある」、F 2 : 「育児は楽しいと思う」「夫婦仲は良いと思う」、F 3 : 「生活に時間的な余裕がない」「生活に経済的な余裕がない」、であった。よって各因子はそれぞれ、「育児上の悩み (F 1)」、「家族関係の良好さ (F 2)」、「生活上の余裕 (F 3)」とした。

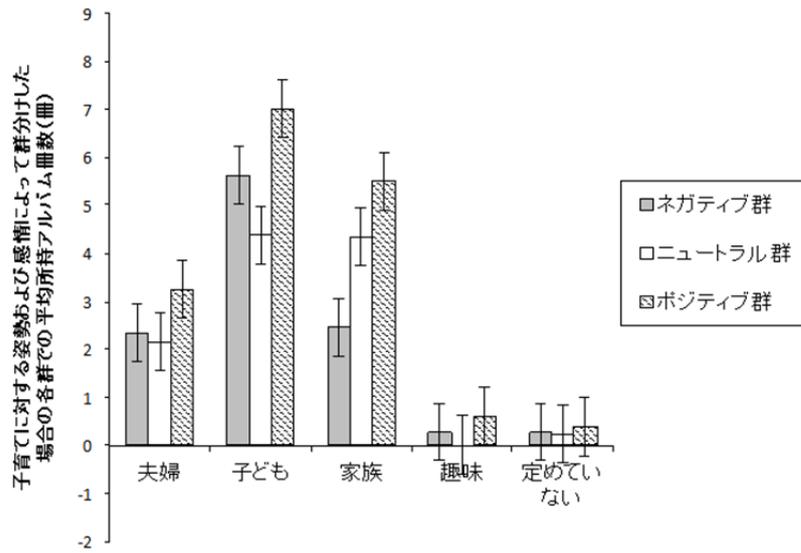
表 3-5 1 育児意識についての因子分析

N= 150	アイテム	因子負荷量		
		I	II	III
Factor I : 子育て上の悩み				
	3. 子育てに悩んだりすることがある	1.03	0.07	-0.03
	2. 子育てにイライラすることがある	0.49	-0.15	0.02
Factor II : 家族関係の良好さ				
	1. 子育ては楽しいと思う	0.06	1.04	0.14
	4. 夫婦仲は良いと思う	0.09	0.31	-0.27
Factor III : 生活上の余裕				
	5. 生活に時間的な余裕がない	-0.03	0.14	1.04
	6. 生活に経済的な余裕がない	0.11	-0.11	0.33
因子負荷量(SS)		1.33	1.27	1.24
因子寄与率		0.22	0.21	0.21
累積寄与率		0.22	0.43	0.64
因子間相関				
	I	1.00		
	II	0.36	1.00	
	III	-0.35	-0.27	1.00

アンケートに回答した全体の傾向として、育児上の悩みは小さく、家族関係は概ね良好であり、生活上の余裕をやや持っている可能性があるといえる。

次に、子育てに対して肯定的かどうかによってアルバムの作成数が異なるかを検討するために、子育てに関する3因子の内、因子1 : 子育て上の悩み、および因子2 : 家族関係の良好さについて、各回答者の平均得点を算出し、それぞれ得点によってグループ化した。この結果、この設問での有効回答数は149で、これを因子1および2の平均得点が高い回答者から順に3つの群(ポジティブ群50名、ニュートラル群49名、ネガティブ群50名)に分けた。各群における平均アルバム所持数は図3-5-2の通りである。また、それぞれのアルバムの種別(夫婦、子ども、家族、趣味、定めていない)ごとに、被験者間の一元配置分散分析(ポジティブ群、ニュートラル群、ネガティブ群)を行ったところ、子どものアルバム冊数で有意傾向の主効果が見られ、家族のアルバム冊数で有意な主効果が見られた。その他のアルバム冊数では主効果に有意な差は見られなかった。趣味、定めていない、子どもと家族において、主効果が有意および有意傾向であったために、多重比較を行った結果、子どもの写真のアルバム冊数では、子育てにポジティブな群の方がニュートラルな群よりもアルバムを多く所持している傾向にあり、家族写真のアルバム冊数では、子育てにポジティブな群の方がネガティブな群よりもアルバムを多く所持していた。このことから、子育てによりポジティブな親は、写真を実際に現像し、アルバムとしてより多く保存していることがわかる。

表 3-5 2 アルバム所持数による育児への意識



(2)家族関係・育児と写真・アルバムとの関係

表 3-5 3 写真・アルバムとの関わりと家族・子育てへの意識

独立変数	子育て上の 悩み	家族関係の 良好さ	生活上の余 裕
設問1 撮影頻度	-0.06	0.19 *	0.05
設問2 写真屋での撮影経験	-0.01	0.00	-0.04
設問3 写真の現像	-0.18 +	0.01	-0.16
設問4 デジタルデータの印刷	0.03	-0.04	0.07
設問6 夫婦のアルバム	-0.04	0.07	-0.02
設問6 子どものアルバム	0.02	0.00	-0.04
設問6 家族のアルバム	0.03	0.05	0.08 +
設問6 趣味のアルバム	0.00	0.08	0.15 +
設問7 家族との子ども写真を張付	-0.05	0.10	-0.15
設問7 子どもの写真を張付	-0.17 +	-0.06	0.11
設問8 写真データを見る頻度	0.00	0.11 +	0.07
決定係数(R ²)	0.10	0.21	0.21
補正R ²	0.00	0.13	0.13

*: $p < .05$, +: $p < .1$

(1)で示した設問の各因子について、育児や家族関係に写真撮影やアルバムの作成がどのような影響を与えるのかを明らかにするために、写真・アルバムに関する量的変数を持つ設問を独立変数、「育児上の悩み」「家族関係の良好さ」「生活上の余裕」の3因子をそれぞれ従属変数とした重点回帰を行った(図 3-5 3 参照)。この結果(図 3-5-3 参照)、育児上の悩みには「写真の現像(設問3)」と「育児の写真アルバムに張り付ける(設問7)」が負の影響力を持っていた。これらのことは、撮影した写真を現像すること、アルバムを作成する行為が育児上の悩みを軽減する可能性を示唆している。次に家族関係の良好さには、「写真の撮影頻度」と、「写真のデータを見る頻度」が正の影響力を持っていた。

これらの結果は、家族で写真を撮ったり、撮影した写真を見たりする行為そのものが、家族関係を良好にしていることを示唆している。

生活上の余裕という点については、「家族のアルバムの冊数」「趣味のアルバムの冊数」がそれぞれ正の影響力を持っていた。これは家族や趣味に関するアルバムを作成すること、並びに保存することが生活上の余裕のなさを消してくれる可能性を示唆している。上記のことより、写真を撮影すること、アルバムとして撮影した写真を保存すること、アルバムとして残した写真を家族で見るとは、それぞれ育児や家族関係、生活の異なった側面において良い影響を与える可能性が示唆されている。

(3)保護者向け調査の分析結果

アルバムの所持冊数と保護者の子育て感との関係性について明らかにするため、写真・アルバムとの関りや育児の状況といった項目を独立変数とし、「育児不安」「ポジティブな子育て感」「子育てへの不満」という3因子を従属変数とした場合の重回帰分析を行った。(表3-54参照)

表 3-5 4

表1 写真・アルバムとの関りの動向と子育てへの意識について			
独立変数	育児不安	ポジティブな子育て感	子育てへの不満
アルバムの利用	-0.397	1.977 *	0.618
パートナーとの関係	-4.721 ***	4.409 ***	-4.664 ***
ママ友との交流	4.459 ***	-5.412 ***	2.948 **
一眼レフデジカメ	-0.445	2.811 **	0.776
ガラケー	-1.306	-1.246	-0.252
コンパクトデジカメ	-0.803	0.606	1.289
デジタルとアナログの違い	0.145	0.532	-2.087 *
	0.05;***	.0001;**	.001*:

表 3-5 4 の結果より、写真・アルバムの利用率の高い保護者では「ポジティブな子育て感」を抱きやすいということがわかる。この点はアルバムの利用率の高さが先にあるのか、ポジティブな子育て感も持つことで、写真・アルバムの利用率が高くなるのか、明確な因果関係については明らかではない。

また一眼レフデジカメをよく利用する保護者は、「ポジティブな子育て感」を持つ傾向にあるということがわかった。専門的な機器を利用する家庭ほど、写真・アルバムへの意識が高いと考えられることから、先の結果の通り写真・アルバムへの意識の高い保護者ほど、「ポジティブな子育て感」を持つということが明らかになった。

(4)学生向け調査結果の分析

①アルバムの有無と家族感

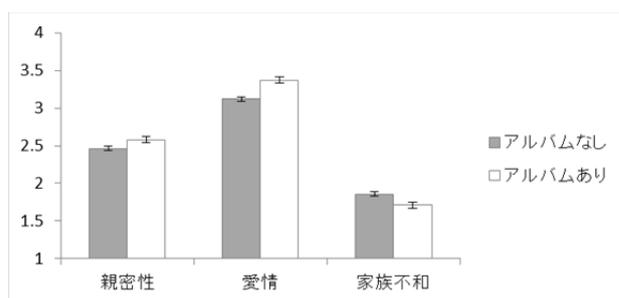


図 3-5 1

学生の家族感と自身についての設問(15)と設問(16)について、因子分析を行った。そこで、まずアルバムを所持している学生と所持していない学生の家族感との関係性の分析を行った(図3-51参照)。図3-51よりアルバムを所持している学生の方が、所持していない学生に比べて、「親密性」「愛情」「家族不和」の全項目において、良好な結果が得られた。(「家族不和」

の項目及び「親密性」の一部項目については、点数の反転を行っている)。アルバムを所持していることで、学生は家族に対して、ポジティブな関係を築き、またポジティブな感情を抱くようになるということがわかる。

②写真・アルバムとの関り並びに家族感と学生の自己形成

学生の種類ごとのアルバム所持数、養育歴の中での写真経験と写真に対しての意識、家族感の項目を独立変数とし、学生自己効力感についての項目を従属変数として、重回帰分析を行った(表 3-5 5 参照)。

表 3-5 15

	持続力		自己同一性	感情統制		自立性	協調性	
自分のアルバム	-1.693	+	-1.325	1.28		-1.387	0.428	
兄弟のアルバム	0.513		-1.477	-1.135		1.16	-0.529	
自分と兄弟の アルバム	0.105		0.353	-0.32		0.192	-0.228	
家族のアルバム	0.799		-0.297	0.324		-0.04	0.124	
それ以外の アルバム	1.006		-0.833	-0.979		-0.541	-0.906	
よく写真を撮って もらった	0.392		1.13	-0.155		2.122	*	0.488
写真を撮られるのが 好き(子供の頃)	1.033		0.085	-0.381		-1.204	1.083	
写真を撮られるのが 好き(現在)	1.449		1.522	1.68	+	2.448	*	3.137 *
将来写真をたくさん 撮りたい	-0.714		-1.205	0.386		-0.734	3.383 ***	
アルバムを作りたい	1.483		0.826	0.869		1.385	-1.017	
親密性	0.172		0.936	-0.746		1.547	-0.299	
愛情	1.193		0.304	1.099		-2.407	*	1.56
家族不和	-3.076	*	-0.531	-4.675	***	-0.338	-1.786 +	

写真・アルバムに関して明らかになった点として、「よく写真を撮ってもらった」と回答している学生は、「自立性」が高くなる傾向にある。また「写真を撮られることが好き(現在)」と回答している学生も、「自立性」が高くなる傾向にあり、且つ「協調性」の項目も高くなっている。養育的の中で、写真を撮られる機会が多かった学生は自立性が高くなり、また写真を撮られることに対してポジティブな場合でも同様の傾向が発生することがわかる。

学生の中でも、本人のアルバムを所持している学生ほど、「持続力」が高まる傾向にある(持続力は逆転項目)。

学生の持つ傾向として、「将来写真をたくさん撮りたい」という傾向が高い学生ほど、「協調性」が高くなることがわかる。これは、写真を撮るという行為が他者への関りを持つ行動であり、自身の子育ての中でも写真を撮りたいということは、子どもに対して積極的に関りたいと考えていることの現れであると考えられる。

(3)分析まとめ

保護者向け調査と学生向け調査の結果分析より,以下の点が明らかになった.

①保護者向け

アルバムを所持している家庭においては,子育てへのポジティブな意識が高くなっていることが明らかになった. アルバムを作ることがポジティブな子育て感を作り出す要因であるとするれば,育児に対してポジティブな意識を持つことが出来ない保護者にとって,アルバム作りを行うことは,子育て意識の改善を行うことにつながるのではないだろうか.

写真についての項目としては,「一眼レフデジカメ」を利用する保護者ほど,「ポジティブな子育て感」を持つという傾向が明らかになった. 現代ではスマートフォンを利用して,簡易に写真の撮影ができるようになり,機器に直接保存することで閲覧するための手間も,大幅に減少した. 写真撮影から閲覧までの工程が簡易になったことで,一般的となった写真はこれまでの特別性が薄れていってしまっている. しかし,簡易な機器を使用する人に比べ,専門的な機器を使用する人にとって,撮影した写真は特別な意味を持つものであると考えられる. だからこそ,子育ての中での写真撮影を,スマホと比べ大型であり手間のかかる専門機器で撮影する人は,子育てへのポジティブ感を持つのではないだろうか.

しかし,上記の2点は互いの関係性が明らかになっただけであり,写真・アルバムと関わるものが「子育てへのポジティブ感」を生み出しているのか,「ポジティブ感」を持つゆえに写真・アルバムと関わっているのか明らかにすることが出来なかった. そこで,学生向け調査をおこなった結果について注目することとする.

②学生向け調査

学生向け調査の結果から,アルバムを所持している学生とアルバムを所持していない学生とを比較した場合では,所持している学生の方が家族へのポジティブな感情を持つ傾向があることがわかった. 家庭にアルバムがあることで,写真・アルバムを見直す機会に繋がり,結果として自分の成長の振り返りと家族との関わりの振り返りとなり,家族への愛着の形成になるのではないかと考えられる.

またアルバムを所持していることが,学生の自己形成に影響を与えているということが明らかになった. 「1; 写真を撮られる経験豊富な学生・写真を撮られることが好きな学生ほど,自立性が高まる」「2; 写真を撮りたいと思う学生は,協調性が高まる」といった点について明らかになった.

養育歴の中で写真・アルバムと関わりを持つことで,学生には家族感の良好な成長と自己形成に対しても,良い効果が得られるのではないかとということが分かった.

4.考察

以上の調査の結果について以下に述べていく。

【1】 写真・アルバムに関連した活動(撮影・保存)を行うことの,子育て中の保護者にとっての意義を明らかにする。

子育て中の保護者にとって,写真を撮る行為は今や日常的に行うことができるものになっている。これは予備調査や保護者向け調査を行った調査結果において,撮影に用いる機器としてスマートフォンと回答する人の割合が高くなっていることからわかる。写真撮影において,使用される機器が専門的な機器からより簡易なものになったことで,より大衆的なものになったのである。これによって,撮影と写真双方が持っていた特別な意味合いが薄れていってしまった。写真がまだ特別なものであった時に比べ個人の撮影頻度は上昇し,写真の枚数も同時に増加するようになった。また写真の持つ特別感は消費活動という意味での負担が存在していることにより,生まれているのではないだろうか。アナログ時代の写真では現像をするたびに業者への依頼を行う必要があり,その都度費用がかかっていた。現代ではデジタル写真になり,個人での写真の現像が可能となった。現像に必要な機器や消耗品も簡単に手に入れることができるようになっている。その一方で,晴れ着のお披露目や行事の記念撮影においては,業者を利用する人がいるといえる。

写真の保存がアナログのフィルムタイプからデジタル保存が可能な機器に進歩したことにより,撮影枚数の増加を促す一因になったと考えることができる。回答者の傾向としても,フィルムカメラを使用している保護者はほとんどおらず,さらにはカメラを使用している保護者自体の割合も先に述べたスマートフォンの利用率と比較すると低い割合となっている。

写真の撮影や保存の手順が簡易になり子どもの特別な瞬間(節目)を保存するための目的だった写真は,日常の風景を残す意味合いを持った,生活行為の中の一部になっているといえるのではないだろうか。多くの場合個人が行う写真撮影は子育てにおいても,撮影をすることが目的であり,個人が撮影した写真そのものへの意識はこれまでとは異なるものとなっていると考えられる。一方で業者などが撮影した写真は,これまでのように特別な日の特別な意味を強く持つ写真であると考えられる。

【2】 子育て感や育児不安との,写真・アルバム活動との関連性を明らかにする。

傾向として,写真・アルバムの所持数の多い家庭は,子育てについても肯定的に取り組んでいるということが明らかになった。この結果は予備調査の傾向並びに保護者向け調査の結果より明らかであり,この傾向は一般的なものであるといえる。これにより子育てへの肯定感とアルバムの所持数が,比例する関係にあることが明らかになった。しかし,写真・アルバムの活用と子育て意識への関連性については,直接的には明らかにすることができなかった。

写真・アルバムを作製することは,保護者にとっては子育ての中での一環なのか,または個人の趣味活動なのかその理由は不明ではある。しかしデジタル技術が発達し作成・保存と

もに手軽になった現代においても、アルバム作りは行われている。このことは、保護者にとってアルバム作りには、感情的な面での特別な意味合いがあるからではないだろうか。手軽さや大量に作成することが出来ることに有用性を求める現代においては、アナログのアルバム作りはそれに逆行しているといえる。印刷や貼り付けなどの過程を踏まえても手軽さの点は弱い。だからこそ、保護者がアルバム作りを行うことには、目的もしくは理由があると考えられる。あるいは、育児において余裕のある保護者は思い出の整理を目的としてアルバム作りをし、その過程で子育てや自身の振り返りを行うことになり、その後の子育てへの意欲をより強くしているのではないかと考えられる。

【3】 養育歴の中で写真・アルバムと関わることで、子どもの育ちにどのような影響を与えるのか、大学生の実態から明らかにする。

学生の育ちに対してアルバムを所持している学生の方が家族への愛情・親密性が高まるということが分かった。家族との思い出を振り返る機会を、アルバムを見直すことで得ており、心情面での強い愛着を生み出すことにつながり、そのことが要因になっているのではないかと考えられる。自分の人生経験のなかでの家族とのつながりを写真として閲覧することや、写真を撮ってもらったという経験またアルバムという形で保存してくれたということが、子どもにとってポジティブな心情を大きくしているものといえる。

学生の自己形成に対しての写真・アルバムの効果としては、学生個人のアルバムの存在によって、課題などのへの取り組みの持続力が増加することが分かった。これは、個人の思い出としてのアルバムの存在により自己効力感が向上し、その結果持続力のある学生へと成長したのではないかと考えられる。また、写真を「よく撮ってもらった」と回答している学生は「自立性」が高まる傾向にある。これは、保護者からよく相手をしてもらったということから愛情に対しての疑問を持たなくなり、自己に対しての自信が生まれることで、自立性が高まる可能性が示唆される。

【4】 結果から写真・アルバムの子育て支援ツールとしての有用性を検討する。

子育てに対してポジティブな保護者ほど、アルバムを所持する傾向にあることがわかった。しかしこれは、子育て意識と写真・アルバムの関係性が明らかになったものであり、写真・アルバムの効果について明らかになったものではない。子育てを短期的に捉えた場合、保護者にとって「子育ての意識を向上」「育児不安の減少」といった要素に対しての、写真・アルバムの効果については今回の調査からは、認められなかった。これは、保護者にとっての写真・アルバムが思い出作りの一環や子育ての活動のひとつとしてのものであり、自身に対しての何らかの効果を求めているわけではないからだろう。

一方で、養育歴の中で写真・アルバムと関わってきた、学生については明確に写真・アルバムの持つ効果が明らかになった。

そこで、育児支援ツールとして写真・アルバムを捉えた場合の活用方法と効果は以下のも

のであると考える。

①子どもの写真を撮るために、子どもと関わる機会を多く設けることで、子どもの自立性を育てることになる。

②撮影した写真を現像しアルバムを作ることで、子どもの持続力を養い、課題や新しいことに積極的に取り組むようになる。

③写真撮影へのポジティブな感情を育てることで、協調性を持った子どもに育つ。

上記の点が、子育てにおける写真・アルバムの子育て支援ツールとしての活用と効果である。

写真・アルバムが持つ子育てへの効果は短期間で現れるものではない。しかし、長期的なものとして上記の効果が発生すると考えられる。保護者に対しての効果は認められなかったと先ほど述べたが、子どもへの効果が明らかになることで、「子育て不安」解消のきっかけにはなりえるのではないだろうか。

【5】家庭科教育における写真・アルバムの活用と、その効果の検討を行う。

調査の結果より家庭科教育において写真・アルバムを活用する機会の提案として、次のような内容が検討できる。

それは「次世代の親となる生徒・学生に向けた、親準備性教育」である。養育期間の途上にある生徒や学生にとって、将来に向けた教育を行うことは家庭科教育において重要視される目的であり、さまざま授業が行われるべきである。そこで、保育領域における授業の一環として、子育てにおける写真・活用について扱うものとする。容易に撮影と保存が可能となった現代において、生徒・学生にとって身近である写真・アルバムを活用することの効果について学習し、その後の子育てにおいて活用することができるようにすることで、将来に向けたより良い子育ての後押しをするものである。

また、実際にアルバム作り活動を授業内に取り入れることで、アクティブ・ラーニングとしての授業展開も期待できる。自身の写真を振り返ることで、それまでの人生における思い出の振り返りを行うことになり、家族への思いの再確認、自己効力感の向上や将来に向けた意識付けを行うことができるのではないだろうか。これは、自身のことのみに限らず、保育分野の授業で行われる幼児との触れ合い体験の授業などにおいても、可能であると考えられる。子どもとの関わりを通じた、愛情や思い出を生み出すものとして写真・アルバムの有用性を体験的に学習することで、生徒が将来的に親になった場合の子育てがより良いものになるのではないだろうか。

実際に、アルバムを所持している学生ほど家族愛が高く、写真・アルバムへポジティブな学生ほど自己効力感が高いことから、この授業の効果は期待することができる。

【6】今後の課題

今回の研究では、参考となる先行研究がほとんど見られなかったために、非常に探索的な意味合いが強いものとなった。そのため、アンケートの項目などについてより細かな検討を行う必要があるのではないかと、集計・分析の過程で思い至った。

保護者が使用する機器などは明らかになったが、これまでの使用した写真撮影業者の動向や、年間の写真・アルバム関連の費用など、子育てにおける消費活動の動向については明らかには出来なかった。これらの質問から、子育てへの取り組み意識を明らかにすることができたのではないかとと思われる。

また、調査が文献とアンケートで行ったものだけであったために、量的研究としての結果を得ることができたが、保護者や企業へ向けたインタビューなどを実施することが出来なかったために、質的な面での調査を行うことが出来なかった。さらなる調査を行う上で、特に写真・アルバム講座に参加している保護者がどのような目的をもって参加しているのかを明らかにする必要があると考えられる。

加えて実際にアルバム作りを行うことが、個人に対してどのような変化を与えるのかについても実験を用いて明らかにする必要があると思われる。個人の写真・思い出整理としてのアルバム作りを行うことで、家族感や人間関係に対する意識と関連しているのかを明らかにすることで、写真の有効的な活用方法の提案につなげることが可能になるのではないだろうか。これは、子育てにおいても効果が期待できるものであると考えられる。

5. まとめ

【1】 調査結果のまとめ

今回の調査から明らかになったことを改めてまとめると以下の通りになる。

- ①アルバムの利用率の高い保護者ほど、ポジティブな子育て感を抱く傾向にある。かつ専門機器(デジタル一眼レフ)を利用する保護者ほど、その傾向が見られる。(保護者)
- ②アルバムを所持している家庭ほど、家族への「親密性、愛情」といったものが強く、「家族不和」を感じる傾向が低くなる。(学生)
- ③写真・アルバムとの関りの経験が多い学生ほど、「自立性、協調性」といった点での自己形成が強く現れるようになる。(学生)

以上の点が今回の調査で明らかになった、写真・アルバムと子育てに関する大きな点である。

①の結果においては、写真・アルバムと保護者の子育てへの意識についての関連性が明らかになった。これにより、写真・アルバムの作成率や所持率が低下している現代においてこそ、ポジティブな子育て感を持っている保護者の傾向を表す指標の一つとして、写真・アルバムのことを捉えることができるのではないだろうか。

②については、学生の思い出形成に関した点で、アルバムの所持数の多い家庭ほど、家族への愛着形成が強くなるという傾向が明らかになった。子どもにとって自分の幼少期やそれ以降の青年期までのアルバムが家庭に存在することは、家族からの関りを持たれていたという確かな自信になる。家族への愛情を抱くために、家族との関わりを記録としての写真・アルバムを残すことで、思い出形成による愛情を生み出すことに繋がると考えられる。

③学生の自己形成においては、一部の点について写真・アルバムを持つ学生であるほど、他の学生に比べて「自立性、協調性」が強化される傾向にある。これは、写真を撮られるという経験が他者との関わりによって行われる行為であり、これにより「自立性、協調性」といった他者との関係性に近い項目が強化されていると考えられる。

子育てや個人の自己形成への写真・アルバムが持つ効果を明らかにすることは、これまで行われてこなかった。これは、撮影や現像、アルバム作りの効果や目的というものが、感覚的に捉えてられていたためであり、かつその内容も感覚的な意味合いが強かったからではないかと考えられる。目に見える形での変化を与えるものと異なり、内面的な変化をもたらすものであり、絶対的に必要であると思われていなかったためではないだろうか。

しかし、今回の結果により写真・アルバムと関わることは子どもの成長にとって、良い影響を与えるということが明らかになった。これにより、今後写真・アルバムの有効的な活用方法が、様々に検討されるようになっていくのではないかと考えられる。

【2】 研究全体を通して

写真を撮るという行為は現代では、日常的に行うことができる活動となった。撮影機器が進歩し、準備から撮影までの時間もほとんど必要がなくなり、ピントを合わせる作業や光度の調節といった作業も機器が自動で行ってくれるように、専門的な知識がほとんどない人に

も写真撮影は可能となっている。また撮影に使用する機器もカメラから、スマートフォンへと移行している。日常的に持ち運ぶ機会が多く、撮影した写真を家族、友人など周囲の人と共有することが簡単に出来るようになったからだろう。写真というものが大衆に広まりながら、特別なものとして認識されていたことは過去のものとなっている。これは、本文中にもあるように、大量に撮影することができるようになったことで、一枚一枚の特別感が低下してしまったからだろう。

しかし、そのような状況の中でも、記念写真の撮影を行う業者は廃れることなく現在でも利用されている。また、スマートフォン向けの現像サービスなども展開されている、これは、多くの人にとって写真・アルバムというものが未だに大切に、そして必要とされていることの現われではないだろうか。だからこそ、親子や保護者を対象とした写真・アルバムに関連した講座やイベントが行われており、参加者もいるものと思われる。写真・アルバムに関する講座はこれまで多数行われてきたが、写真・アルバム作りと子育ての関連性については、明らかではなかった。感覚や経験的なものとして、推奨・実践されてきた活動であったが、今回の研究から子どもに対しての効果が明らかになったことで、今後さらなる発展が期待できるのではないだろうか。

写真は現実に発生している一瞬の情景を保存している。子育てを行っている保護者にとって、子どもが見せる一瞬の動き、成長の様子をいつまでも見ることができるようにという思いで、写真の撮影をしているのではないだろうか。これは、自分や他社のための記録であり、成長した子どもへ向けた行動であるといえる。思い出の共有をすることで、保護者にとっての子どもへの愛情の確認となり、子どもにとっては自分が愛されていたことの確認になるのである。家族としての大切さ、子どもへの愛情表現としての、写真・アルバムの活用が今後も行われていくことを願うものである。